

特 III

249



始

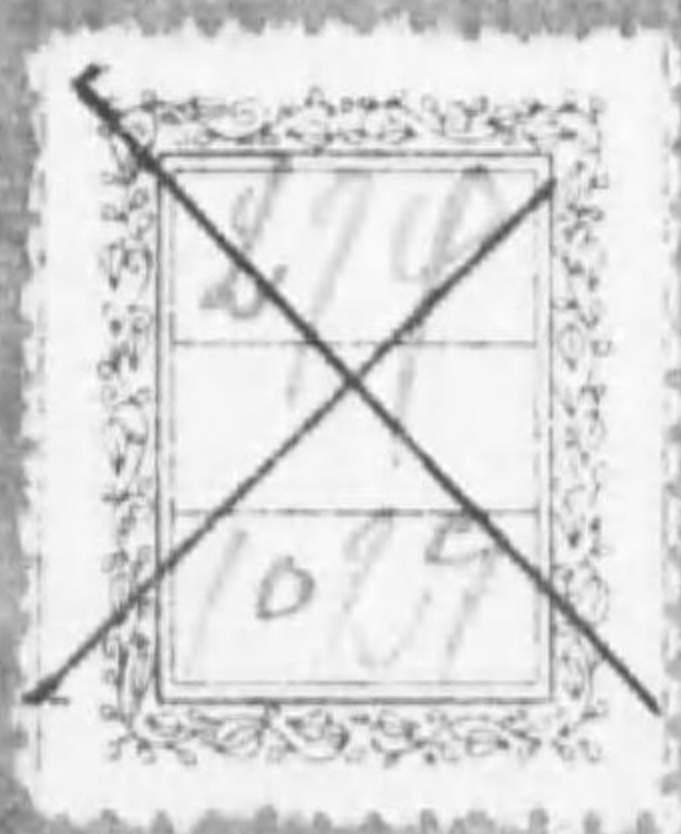


編十三第書藏明文 特 III

論

著平草田森

249



持111  
249



書

第三十編



### 文明叢書發刊の辭

獨にレクラム叢書在リ。英にカツセル叢書あり。佛にネルソン叢書あり。皆世界百科の書を網羅し、内容の充實と價格の低廉と相まちてあらゆる階級の讀者に布遍し、各國知識の開發者たると共に世界文明の指導者たり。而して今迄我日本に此の種の叢書の出づべくして出でざりし事は實に出版界の缺陷にして又實に吾文明の缺陷なり。小院茲に見る處あり、今や乃ち「文明叢書」の出版を企て、最善の力を之に致さんとす。希くば賢明なる讀者の深厚なる同情によりて、叢書の篤を重ぬるに隨ひ、我が同胞の各戸に最も完全にして最も便利なる圖書館を建設するを得んか。

發行者謹白

踊

森田草平

踊……………一

名取弟子……………三〇

しほ子……………四五

伊勢詣……………七三

## 踊

幸三は朝飯の箸を下に置くと、つと立上つて椽側へ出た。

今日も朝から蒸暑い。頸筋の邊りぢと／＼と油汗が滲んで、靜乎として居てさへ息苦しいやうな日では有る。幸三は冷々として椽側の板を素足に踏んで、柱の根に尻を落したまま、先づ燐寸を擦つて巻煙草に火を點けた。一口ばつと薄白い煙を吐きながら、そろ／＼新聞を取上げにかゝつた。

臺所では、朝飯を喫べた後の皿小鉢を洗ふ音がする。家の中は靜かて有る。ぢぢぢと裏の櫓でする蟬の音が絶えず耳につく。不圖塀の外を小走りに駈けて來る足音に氣が附いて、幸三は顔を上げた。途端にばら／＼と煙草の灰が新聞の挿繪の上に落ちた。

「御免下さい」と、毎日今時分遣つて來る千鶴ちゃんの声がした。お兼ちゃんと二人連れらしい。

「お這入り」と、幸三其處に坐つたまゝ返辭をした。

がら／＼と格子戸を開けて、二人の女の子が上つて來た。二人ともメレンスの長い袂をひら／＼させながら、椽側に兩手を突いてお叩頭をした。そして、突然、

「お師匠さんは？」と訊いた。

「あゝ、二階に居るよ。」

「左様、髪上げて？」と、千鶴ちゃんが首を傾げた。歳は十三、尋常科の六年生、少しお出額だけれど、眼の瑞々とした、口元の可愛らしい子で有る。

「如何だか」と言ひながら、幸三は吸差しの巻煙草を庭へ捨てた。吸殻は狭い庭の塀に突當つて、其下の棚に二つ三つ並べた朝顔の鉢の中へ落ちた。はらはらと粉の様な灰が淺緑の葉の上に振りかゝつた。

二人は互に顔を見合つて笑つて居た。何やら點頭きながら、千鶴ちゃんが茶の間へ將棋の盤を取りに行く。例に依つて、お稽古を待つ間、ぬすみ將棋でも爲やうと云ふのである。又がら／＼と格子戸の音がした。

「お稲さん？」と、千鶴ちゃんが將棋の盤の上に駒を積上げながら、背後向きに言つた。

「おかずちゃんよ」と、向ひ合つて坐つて居たお兼ちゃんが小聲で教へた。

「お師匠様、今日は」と、おかず子はべたんこと倒れる様に椽側へ兩手を突いた。

「あら、可厭だ。お師匠様居ないわよ。」

「うゝむ」と、おかず子は齒の脱けた、悪戯らしい顔を振上げて、四邊を見廻した。「それ何に？將棋？私も遣るんだい。」

「あら、おかずちゃん、不可ないわよ」と、千鶴ちゃんは邪慳に其子を押除けるやうな手附をした。

「おかずちゃんには未だ出來ないことよ。それよか、お稲さん如何して？未だ出て來ないの？」

「お稲ちゃん、後から來る」と、おかず子はべそを掻くやうな顔をした。お稲さんは此子の姉さんで有る。

幸三は子供達の煩さいのを我慢しながら、にや／＼笑つて煙草を吹かして居た。千鶴ちゃんとお兼ちゃんとは、お數ッ子だけ打捨つて置いて、平氣でぬすみ將棋を始めた。指一本で鼠がお供への餅でも引いて行く様に、息を凝らして、窃と將棋の駒を引いて行く。ことりとても音が爲たら、直ぐお次へ番を譲らなければ成らぬ。お兼ちゃんは將棋の盤に負ひ被さる様にして、すう／＼鼻を鳴らしながら、こそ／＼と王様だの飛車だのと引いて行

く。

「まアお兼さん旨いわねえ」と、千鶴ちやんが嘆息した。

「えへーいーい」と、お兼ちやんは首を引込めて、一人得意らしい笑ひを漏らした。此夏から前髪の切つたのを上げたので、生え揃ふ迄輪に成つた花櫛を挿して居る。

「あら音がした。」

「左様」と、起上つて、素直に番を譲りながら垂れ下る前髪を煩さ相に指で搔上げて居る。今度は千鶴ちやんが代つて駒を引出した。が、一寸手を突いた拍子にことりと音がして直に又お兼ちんと入れ代つた。人の世の罪惡から自由な子供の手は皆白く美しい。其中にもお兼ちやんの小指の可愛らしいのが目に立つた。

「お兼ちやんは何年生だい」と、幸三が想出した様に訊いた。

「えい、お兼さん？」と、千鶴ちやんが傍から代つて返辭をした。「お兼さんは今年四年に成つたのよ。」

「ぢや歳は？十一？十才？」

「十一でせう」と、千鶴ちやんはお兼ちやんの耳の端へ顔を持つて行つて、「ね、左様だわねえ。えい？」

當人は俯向いたまい、にや／＼笑つて居る。

「お福面／＼／＼」と、何と思つたのか、不意にお數ッ子が叫喚いた。

「何です、不可ませんよ」と二階から降りて來たお組が制した。梯子段の附根に立つたまま、「本當にお數ちやんは騒々しくつて不可ませんね。え阿父さんに吩咐けますよ。」

お組は瘠せた女で有つた。夏場は殊に暑さ負けがして、蟋蟀の様に骨ばつて居た。朝の間だけにしやんと帯を結んで、顔にも白いものを塗して居るから、未だしも瞳子に露を帯んで、打見には一寸はツきりして見えるが、何處やら倦怠る相で、人工の裏から、肉體の衰へが、仄見えて居るで、お組は毎時の所に坐つて、

「何うも皆さんお待遠てしたのね。え、さ何誰が先でした？お兼さん？」と言ひながら伸上つて、三味線掛けから花櫛の胴の稽吉三味線を卸さうとした。が、坐つた儘では、最う二三寸の所で手が届かない。一番歳上の千鶴ちやんが、早速舞臺の上へ乗つて取つて遣つた。

「あい、左様々々、今日は千鶴子さんの番でしたれ」と、お組はそれを受取つて膝に抱えた。「今日は？何處やら迄行てましたね？ あい、——まさきの桂寄りかけて、しなだれかづら玉かづら——彼處迄行つてたんですね。ぢや、一度はなからお渡へして——」

千鶴ちゃんは、つと味噌ッ齒を出して點頭いた。それから薙刀に見立てた檜の棒を小脇に挿込みながら駈出して、舞臺の片隅に立停つた。直に地方のつけ臺詞で、

「其人に物問はう。わらはが尋ねる公達の」から、チチンリンシヤンと三味線に成つて、綾の被衣たをやかに、十六七の細眉に鐵漿くるくと粧ひしお稚兒の旅に逢ふことの、若しやちらりと三日月ならば、教へてたべの里人と、うつゝ涙に譯もなき」と、唄の文句に伴れて、若者を慕ふ狂女らしい振が有る。と、花道から本舞臺へかゝる心持で駈けて行く。

それから「諸國廻りの天照す神をあきなふ」で、獅子まはしの出に成ると、お組は三味線を下に置いて合方に立つて遣つた。だん／＼踊り進んで、「正木のかづら寄添ひて、しなだれかづら玉かづら、長鳴き鳥の常闇にしつほり汗を角兵衛獅子、獅子はお家のてれつくてん、つく／＼見れば、てんと堪らぬしなものめ」の邊り、千鶴ちゃんの踊には未だ狂女らしい氣分は出ないけれど、振が振だけに、折々はつと思はせるやうな色ッほい嬌態をして見せた。

幸三は足を投出して、障子の枠に脊中を凭せながら、つく／＼二人の稽古を見て居た。殊に丸で色氣のない女の子が、教へられるまゝに、無心に色ッほい仕草をするのを見て居ると、憐れなやうな、不思議なやうは、何とも言はれぬ興味をそゝつた。此子が年頃に成

つて今日習つたことを振返つて見たら、何んな氣がするだらうとそんな事迄想ひ遣られた。で、一段濟むのを待つて、

「こりやア何と言ふんだい」と訊いて見た。

「えい、これは鞍馬獅子」とお組は元の座へ歸りながら返辭をした。舞臺の上に立つたまま、長い袂で鼻の頭の汗を拭いて居る千鶴ちゃんを顔を見合せて、

「一段踊ると、眞個汗が出ますわれえ」と、臂を上げて舞扇を使ひながら、はた／＼と帷子の脇の下へ風を入れて居る。千鶴ちゃんは顔中笑窪にして笑つた。

「矢張長唄かい」と、幸三は前の問ひをつけた。

「清元ですよ」と、お組はたしなめる様に振回つた。「長唄の鞍馬とは又丸切り別ぢや有りませんか。これは何でも富元に有つたのを作り換へたんだと云ふことですよ。間の多いもんだから、間、間と取つて行くのが随分艱かしいんですわれえ。」

かう言つて、又千鶴ちゃんに話し掛けた。千鶴ちゃんは只きまりが惡想にして笑つて居る。

お組が子供の時おぼえた藝をあゝの儘捨て、仕舞ふのが惜しいと云ふので、濱町の大師匠の許へ通ひ出してから、彼是最う十年にも成る。十年の間、毎日の様に絶えず三味線の音



を聴いて居ながら、未だ長唄と清元との區別が分らない幸三も憫れだけれど、幸三には又幸三で別の考へが有る。一度お稽古を見たゞけぢや、話の筋も好くは分らないが、何でも若い上臈が公達の跡を慕ふて都を迷ひ出た。其途すがら角兵衛獅子に逢つて、鞍馬へ行く道を訊れると、美しい狂女と見て、何うやら調戲つて遊ぶ氣らしい。お獅子の舞の鈴が公達に見えて抱緊めたり、角兵衛にもしなだれ懸つたりして、とんと板の間に寝轉んで頬杖を突くなど、意識のない狂女の仕業だけに一層心をそゝられるやうな力強い或物が有る。それを調戲ふ角兵衛の振にも、野卑な、とは云へ軽いユーモアが貫いて居た。こんな面白味はお組には解らない。教へる者も、教へられる方も、無心である。それで居ながらあれだけの情調がにじみ出る所を見ると、今更型と以ふものゝ有難さがしみじみ思はれた。

お組は一服喫ふ——と此女は煙草を喫はない。これは唯フイギユラチーヴに言つたのである——又立上つて千鶴ちやんに四五度稽古をつけて遣つた。一通りそれが、腹へ這入つたと見ると、

「ぢや、今日は此處迄にして置きませうね。」

千鶴ちやんはお叩頭をして無臺を降りた。お組は其上に立つたまい、

「さ、今度はお兼さんよ。」

お兼ちやんは扇子を持つて上つて來た、此子は通りの酒屋の娘で、お稽古に來出してから未だ一月半にしか成らない。やつと鷹奴の上つた所である。それでも踊の質が好いと云ふので、お組はたのしみにして居た。

「あい、お稽古の方から先にしませうね」と言ひながら、お組も扇子と棒とを取つて來た、で、ひろげた扇子を草紙の積りで小指に挟みながら、日傘代りの棒を擔いで、ちよこくと花道から馳けて出た。

「あかね眺めの可愛らし、おそ櫻。まだ當なり、花娘。寺子戻りの道草に、てんと見事な色櫻」で、花瓣を摘んでフイと吹く仕草や、紙摺を捻つて縁結びをする仕草だのが有つてと、恥かし相に、「お師匠さんの仰有つたをほんに忘れはせぬけれど」で、何遍もお叩頭をするのだが、お兼ちやんでは何うも未だませた小娘らしい嬌羞が出ない。それでも教はつた通りを一生懸命に遣るのを見て、幸三は思はず噴飯したいやうな氣がした。

お組は傍に立つたまい、口三味線で、其處のところだけ三四度遣らせて見た。

「ぢや、其處迄にして、今日は鷹奴の渡ひ返しを爲ませうね」と言ひながら、自分の座へ歸つた。「さ皆さんも一緒にお渡へなさいな。」

「千鶴ちやんもお稻さんもお數ッ子も、皆一緒にどや〜と舞臺へ上つた。お兼ちやんは

其真中に成つて踊つた。一番稽古が淺いが、演ることはそのつが無い、角目々々がはつきりして、見て居ても心持が好い。

「一ト聲は彼奴が鳴いたか、初鯉、羽を生じて飛ぶといふ、譬喩は聞けど、目前にして、ストンときばを爲る所など、色氣のない子供だけに、裾がまくれやうが腰が出やうが、そんな事はお構ひなしに皆思ひ切つて遣る。それが可愛らしい、幸三はにや／＼笑ひながら見て居たが、不圖、お兼ちやんの足の目立つて白いのが眼に着く、これ迄女の色の白いと云ふことは格別氣にも留めなかつた。が、白足袋を穿いて、それにもめげぬ程透徹る様に白いのは、見るに美しいものである。

「いつそ斯うして手捕りに押へ、さッ呉れべい」で、後向きにびとツら股を展げながら、「とんびとろ、や、躍りかけてぞ、後を慕ふて走り行く」と、皆々舞臺の後ろへ這入る。

お兼ちやんは脇差や釣瓶竿に見立てた棒を片附けて來て、少時汗を拭いて居たが、一寸千鶴ちやんの顔を覗く様にして、何やら黙頭き合ひながら、

「左様なら」と挨拶して、そこ／＼に歸つて行くかうして二人は毎も待合せて、一緒に戻つて行くのである。

幸三もそれを機ツかけに二階へ上つた。二階は小母さんが掃除をした後、障子を開放し

て置いたので、風と云ふ程のものもないが、四方の窓から冷たい朝の氣が流れ込んで來る机の前に坐つて、ぼんやり書きかけの原稿を見詰めたまゝ、幸三は何時迄もペンを取上げやうと爲なかつた。やがて又燐寸を擦つて巻煙草を啣えた。

何だか來ぬ女を待つて居るやうな、女に待呆けを喰はされたやうな氣がして、何うも心が落着かない、町の瓦屋根に當つて居る日影や、向ひの久世山を上つて行く、巡查の白服やを見て居ると、後から追掛けられるやうな氣がして、ぢり／＼するけれど、矢張書く氣には成れない。階下では絶えず三味線や足拍子の音がして、時々お組が肝高な聲で、

「一つとんと踏んでから右へ廻るんですよ。毎日々々同じ事ぢやありませんか、えい、それぢやなんば——此人は未だなんばが解らないのかね」と、口叱言を言ひながら舞臺へ上る様子が手に取る様に聞える。

「マア舞臺で坐睡りする人がありますもんか。一遍水で顔を洗つて被入しやい」  
こんな事を言ひながら、姉娘の方を流元へ連れて行くらしい。

それを聞くと、幸三はいよ／＼背々して來た、馬鹿！馬鹿と、お組を罵つて遣りたいやうな氣もした。彼の子は頭が悪いんだ、輕業師が弟子を仕入れや仕舞ひし、他所の子をそんなに迄して教へて如何する？それで自分でも面白けりや可いけれど、自分迄を腐らせて

肝癢を起して居る、あんな馬鹿な奴はない！

が、お組の馬鹿よりも、自分の方が一層馬鹿かも知れない、最初お組を稽古に出したのは。自分の物所好から遣らせたのだ。六七年もお扇子を持つたことがないと云ふので、うぢくして居るのを無理に押出す様にして遣つた。一旦通ひ出してからは、お組も根氣好く通ひ詰めた。いよく師匠から名前を貰ふ迄に稽古を積んだが、偕て左様した所で別に使ひ道がない。藝者ではないからまさかお座敷で踊る譯にも行かない。女優に成るには歳を喰べ過ぎて居る。左様かと言つて、素人の隠し藝にして置くには、餘りに専門的に成つて居る。切めて忘れぬだけの用心にもとて、一人二人弟子を取ることにした。最初の間は幸三も下座敷の舞臺を拵へたり、表の、軒燈に朱で藤の丸に花菱の紋をあらはしたりして喜んで居た、格子戸の中に赤い鼻緒や、朱塗のこつほり下駄が脱いで有るのも、何となく賑やかなやうな、嬉しいやうな氣がして居た。が、それも慣れてはさのみ興味も惹かない。却て一旦踏みつけた世間體と云ふやうなものが氣になつて、足拍子や三味線の音も煩さく耳に着く、勿論それ位なら止めた方が可い。止めさせた方が可いと思ひながら、矢張ぐづぐづとして居る。

お組は只遣れと言はれたことを飽迄つゞけて居た。濱町の師匠へも飽かず通つた。近頃

では踊にばかり熱中して、だん／＼他の興味を忘れて行くらしい。尤もそれは止むを得ず左様成つたのかも知れない。自宅へ来る子供に云ふ叱言一つにも、何處か昔の師匠めいた頑固な所が出て來たのも、考へて見れば憫れでも有る。

幸三はどたりと仰向けに倒れて、兩手を頸に支へたまゝ、凝乎と煤けた天井に見入つた。

## 二

何時の間にか、三味線の音も止んで居た。

幸三はむつくり起上つて、ぎよろ／＼四邊を見廻して居たが、つと立つて二階を降りやうとした。一段づゝ梯子段を踏んで降りて行くと、裏の椽側に小母さんが針仕事をして居るばかりで、誰も其處に居ない、伊豫簾が有るか無きかの風に揺いで、人去つた舞臺は落着いた木理の色に光つて居た。

「お組は？」

「えい、お湯へ行つた様ですよ」と言つたまゝ、小母さんは少時針を動かして居たが、やがて又顔を上げて、「何か御用なんですか。」

「あい、お茶を一つ入れて貰はうね。」

「えい」と、小母さんは縫かけの冬物を側に押遣りながら、眼鏡を外して、やつこらさと立上つた。長火鉢の前に坐つて、お茶の鐘を鳴らし始めた。

幸三は又椽側の柱の下に蹲まつたまい、座蒲團を引寄せて尻に敷いた。見るともなく庭の片隅の江戸菊や、夏蜜柑の種子のこぼれた自然生えなぞを眺めて居たが、

「おい、朝顔が最う凋みかけたね。」

「左様ですか」と、小母さんは湯呑に茶を注いで小さな羊羹の切れを二片添えて持つて来たが、盆のまい幸三の膝の前に置いて、「あんなに花が少さく成つてねえ。何でも植木屋が左様言つてましたが、お鯉節を削いて根元に遣ると可いんですとさ。そりやあ見違へる程ずん／＼生びて、花も大輪に成る相ですよ。」

「へえ、そんな物が利くんか。」

「えい、左様ですとさ。縁日へ持つて出やうとする、二三日前からお鯉節を遣つて置いて大きな花が咲いた所で賣るんだと云ふことですよ、ですから其肥料が利いてる間は大きな花が咲くんだけれど、だん／＼日が経つに伴れて小さく成るんですよ。私も何うも不思議だん／＼とばかり思つて居たんですがねえ。」

幸三は別段氣に留めても聞いて居なかつた。で、相手の話が止むと、急に話題を轉じやうとして、

「あのお兼ちやんと云ふ子の踊は未だ拙手だけれど、割合に折目々々がはつきりして居るねえ。あれは如何かな。」

「えい、左様ですよ」と、小母さんは別に歸らう氣色もなく隨いて来た。「癖のない踊で、あの分で行けば先がたのしみですよ、お組の小さい時が全然彼の通りでしたかねえ。」

幸三は小母さんの顔を見返したまい、黙つて居た。小母さんはなほ言葉を續けて、

「ですから、先の師匠なども此子は末がたのしみだと言つて呉れたんです。まアそれが爲に親爺の方でも、彼女には随分力を入れたもんですかねえ。えい、斯う云ふ藝事と云ふものは、何だ彼だと言つてそりやあ餘計なお金子が入りますからねえ。」

先般も小母さんが葛籠の底から垢染れた古い友禪の小片を見付け出して、鳳凰を圓く打出した模様をつく／＼眺めながら、

「これも鯉三郎さんのお洩ひに、わざ／＼京へ染めに遣つた長繻絆ですがねえ。」

と、そつと溜息を吐いてるのを見たこともあつた、西川流の踊の名手、鯉三郎が一世一代のお洩ひを門前町の末廣座で開いた時の話は、何度となく小母さんの口から聞かされたも

のだ。幸三はそんな事を想出して、一人にや／＼笑ひながら茶碗を弄つて居たが、だが、彼奴は本當に踊が所好なんでせうかね」と訊いた。

「お組ですか」と、小母さんは一寸憫れた様に相手の顔を見返したが、「まア所好なんでせうねえ、又それでなげりや濱町のやうな、假にも家元のお師匠さんへ傳手もなしに一人で出掛けて行かれるもんぢやありませんよ。今考へて見ても本當に能く行つたもんだと思ひますねえ。」

「ふいん」と、幸三も仕方なしに笑つた。

小母さんは極り悪相にして、聲も立てずに笑つて居たが、「それからでも何ですわれえ、彼様な役者や藝者ばかり大勢来る所へ、只一人素人の女が能く通つたもんだと思ひますよ。」

「まア可いさ」と、幸三は遮ぎる様に言つた。「今ぢや最うそんなに小さく成つてる譯でもあるまいからね。」

「えい、そりやア最うれ」と、小母さんも眞顔に成つた。「只これ迄の辛抱が能くつゞけられたと思ふんですよ。一つは自分にこれならと云ふ慢心もあつたからなんです。彼女は姉と違つて三味線の方はからきし駄目でしたけれど、踊と鳴物だけはまア何でしたよ。そ

りやア又鯉三郎さんでも、内弟子には格別稽古が厳しいんですからね。寒中なぞ暗い間から叩き起されて、舞臺の板の間に坐つて大鼓を打入れるんでせう。終ひには指の甲が破れて、血が慘むんですもの、見て居ても惻々しい様なんですよ。」

幸三は巻煙草に火を點けて指の又に挟んだまゝ、疑乎と眼を瞑つて聽いて居た。何度も聞かされた話なので、別段返辭をすることもない。煙草の火は喫はれぬ儘にずん／＼經つて行く。

小母さんも落散つて居る新聞の上へ俯向いて、續物の弘法大次郎を讀んで居たが、ほつと溜息を漏して、

「何うも最う眼鏡がないと不可く成りましたねえ」と、呟く様に言ひながら起直つた。

少時左様して居たが、「まア一寸」と、急に幸三の袖を引張る様にして、

「一寸あの裏の椽側を見て御覽なさい。まア可愛い雀——が飛べないんですよ。未だ小さくつて飛べないんですよ。」

「ふむ」と、幸三も眼を開いて裏の椽側を見遣つたが、成程小さな雀が一羽何處からか道入つて来て、ばたばた羽翼を遣りながら飛べないで居る。「ふむ、如何したんだらうな。未だ羽翼が弱くて思ふ様に飛べないんだね、巢立をして、間がないんだらうか。」

「あれ、親鳥が来てますよ。何やら口に啣えて——あの椿の樹を見て御覽なさいあれ、裏の扉へ飛んだ！」

成程、親鳥も来て居る。何やら蟲の様なものを口に啣えて、けぼく、四邊に心を配りながら小雀の傍へ近附かうとして居る。子雀の方でも、それを見附けると遽て、親鳥の傍へ行かうとしたが、思ひ切つて飛ぶ拍子に地上へ落ちた。小母さんは思はず、

「あれッ」と言つて伸上つた。私も立つて様子を見やうとした。

親鳥が傍へ来て、何やら口移しに喰はせて居る。子雀は口を開いて待つて居る。

「まあ彼んな可愛らしい口をして——」

「ふむ、可愛いもんだね。」

親鳥は一刻も靜乎として居ないで、彼方此方飛んで居る。最う喰はせる物がないらしい。

「ね、何か持つて来て遣りませうか。」

「左様だね、併しそんな事したら逃げちまやしないか。」

「大丈夫ですよ。」と、小母さんは臺所へ駈けて行つて、杓子の儘御飯粒を取つて来た、そして拔足差足しながら襖に添うて近づいて、ばらばらと裏の棧側に撒いて遣つた。雀は二羽とも驚いて飛上つた。

が、間もなく又少しづつ近寄つて来た。おづ／＼縁側の上へも登つて来た。一口啣えては、四邊をきよ／＼見廻しながら、子雀の傍へ持つて行く。又歸つて来る。少時の間、こつ／＼板の間を叩く嘴の音が／＼。

「早いもんだねえ、彼れだけの御飯粒を最う喰べちやつた」と言ひながら、幸三は又元の座蒲團の上に尻を落した。そして又新しい巻煙草に火を點けた。

小母さんはなほ飽かず眺めて見たが、

「ね、彼様して飛ぶことをおぼえるんですね」とそろ／＼振向いて、幸三と顔を見合せた。

### 三

午後の日影が二階の障子一杯に當つて居た。

幸三は其下にスタンダードの辭彙を枕にして、午睡の夢を食つて居た。はだけた胸の邊り玉のやうな汗が流れて、如何にも寢苦し相で有る。時々うつゝて手の甲を頸筋の邊りへ持つて行つたが、不圖、何の豫想もなくして眼を見開いた、が、眞白な障子の紙が映ると

直に又眼瞼を閉ぢた。

階下では三味線の音がして居る、時々とん／＼と云ふ足拍子の音も聞えた。又、誰か來て居るらしい。

幸三ははつきり目を覺して起上つた、又煙草の函を引寄せて、一本口に啣へたまゝ、ゆる／＼紫の煙を吐出して居たが、階下の三味線は急に唄から臺詞に移つて、

——狂ひ／＼て來りける。

「や、何ぢや、戀人が其處に居たとか。えい、又嘘言ふか。譯もないこと言ふわい。い。あ、又例の保名を遣つてるんだな。」

斯う思つて、幸三は巻煙草の灰を落した。日頃から清元では保名、常盤津では夕霧だと思つてるだけに、これだけは突然聽いてもそれと解つた。が、それにしても立つて居るのは誰だらう。今頃誰も自宅へ來る筈はないのだが——

幸三は一層耳を澄して聽いて居た。が、矢張何うも解らない。其間、おひ／＼唄ひ進んで「高根の花や折ることも、泣いた顔せず、腹立てず、情氣もせれば柔順しう、アラうつつなの妹脊中の」邊に成ると、お組のやうな悪聲でも、歌の文句と節附が優れて居るだけに、何時かうつとりと引入られる。それから、

「しかも去年の櫻時、植ゑて初日の初會から、逢ふての後は一日も、たより聞かれば氣も濟まず……たまに逢ふ夜のうれしさに、酒事やめて語る夜は、いつよりもツイ明けやすく……いつそ流して坐つければ、日の出る迄とそれなりに」など、ところ／＼心にとまつた歌の調べを繰回して、最後に「似た人あらば教へてと振の小袖を身に添へて、狂ひ亂れて伏沈む」と、小袖に搦むだ狂ひが有つて、唄も止む。

「えい、何うも有難う御座いました」と、男の聲がした。彼處のところはあれで好いんでせうか。何うも變てしたれ。かうして、それから斯うでせう。何うも其處ンところか——  
「えい、左様、々々」と、言つて居たが、「左様ね、彼處は斯うでせう」と、お組も立つて舞臺へ上るらしい。

一しきり又足拍子の音が聞えた。

幸三は未だ誰だか解らなかつた。が、そんな事は如何でも可いにして、皺／＼に成つた前身を掻合せながら、どしん／＼と一段づつ梯子段を降りて行つた、角帯を緊めた二十歳ばかりの男が舞臺の上に立つて居た。

「あ、銀さんか。珍らしいお客ですれ。」

銀さんと呼ばれた男は速て、舞臺から降りて、疊の上に平伏した。兩手を頭よりずつと前

へ出して、お叩頭をしながら、口の中で何やらどぼ／＼言つて居る。  
「えい、えい、何うも」と、幸三も好い加減に挨拶をした。

平生餘り他人からお叩頭をされつけないだけに、希にこんなお叩頭を爲れると、何だか馬鹿にされたやうな氣がして堪らない。何時か友達に伴れられて、樂屋へ這入つて行つた時も、或名題役者からこんな種類のお叩頭を喰つた。それが藝人らしいのかも知れないが腹で輕蔑して、表面で閉口されるのは、餘り有難いものではない。尤も、銀さんのは左様云ふ了簡でして居るのではあるまい。銀さんは未だ子供だ。可成氣の好人でもある。まあ仲間の者が遣るから、自分も左様しなけりや成らぬ位に心得て居るのかも知れない。  
「れ、今度の寄居行が延びたについて、わざ／＼銀さんが知せに來て下すつたんですよ」と、お組が傍から口を添えた。

「あい、左様か／＼」と、幸三は襲れてお叩頭をした。

「あれは何でしたかれ。左様／＼、今度宮様が急におかくれに成つて、帝劇の方が二日先へ延びたもんだから、如何しても間に合はないんですとき。ですから來月の廿日にするんだつて——えい、左様でしたわれ。」

「えい、まアそんな様な事だ」と、銀さんは例の甘えたやうな調子で言つた。

「何しろ宮様の事ですから、何うも致方がありませんで、えへい、えへ。」

「左様ですれ、だが、何うも遠方の所わざ／＼——」

「えへ、如何いたしまして——私やなに、最うお洩ひをして頂いたんで、別にわざ／＼と云ふ譯ぢや——へえ。」

「あら、私が三味線を教はつたのよ」と、お組はサイダの鎌を抜かうとして、顔を聲めながら言つた。

「何ですか、教はつたり教へたり——」と、銀さんはにや／＼笑つて居る。

「さ、召上れ」と、二人の前へ泡の立つ洋盃を侑めながら、不圖何か思ひ着いた様に、「如何です、いつそ二階へ被入しちや。」

「うむ、最う踊らないなら二階の方が可いね。ぢや、二階へ上ることに爲やうか。」

幸三は膝のまはりの煙草の袋を持つて立上つた。其後からお組もバナナと水蜜を盛つた鉢を捧げて隨いて來た。最後に上つて來た銀さんは、扇子を持つたまま、窓の闕に手を支いて、早稻田田圃から目白臺へかけて一帶の森の景色に見惚れて居たが、

「眞個お宅は眺望が宜しいんですね」と、銀さんらしいお世辭を言つた。

「えい、まア夏向きの家だ」と、幸三は背後へ手を支へて片足投出しながら言つた。「其



代り冬に成つちや秩父嵐が眞當面に吹きつけて眞個堪らない。」

「えへ」と、銀さんは矢張窓際に立つたまい、「ありやア何處でせう、彼處にぼんやり籠がかいつて、一段高く見えるのは？」

「あれ？あれはね」と、お組が引取つて言つた。左様々々、「護國寺の本堂よ。」

「へえ、成程な」と、銀さんは別段氣にも留めて居ないらしい。

「まあ此處へ被入つしやいな」と、お組は麻の座蒲團をそこへ直して、「私、一寸階下へ用事が御座いますから、二人でお話して居て下さいな。」

「ふむ」と、幸三は黙頭いた。お組は階下へ立つて行く。銀さんが座に直るのを待つて、全體寄居と云ふのは何の邊だらう」と聞いた。

「何でも熊谷から汽車を乗換へて、山の中へ這入るんだ相ですよ。」

「ぢや、矢張秩父へ近いんだらうね。大宮へでも行く道に當つて居るのか知ら」と、首を傾けたが、

「で、何ですか、今度の招待には何人位行くんです。」

「まア八百人位と云ふ見込みだ相で。」

「八百人は驚いたね。それだけの人数が押掛けるんぢや、汽車の中なぞ、嘸暑いことだら

うね、えい。」

「何しろ朝行つて夕方歸るんだ相ですからね。」

「ふむ、其奴はお手傳ひの連中が堪るまい。銀さんなんざ眼が廻るだらうぜ」

「えい、何うも」と、銀さんはにや／＼笑つて居る。

此銀さんと云ふのは師匠の家の身寄のもので、現に兄さんは歌舞伎の立女形の後目を繼いで大名題に成つて居るんだが、如何云ふものか常人踊が嫌ひで、小さい時から米屋町へ遣られた。が、川立ちは矢張川で育つとやらで、何うも其方も思はしからず、近頃では又自宅へ戻つて、改めて又師匠の家へ内弟子に入込んで居るらしい。

で、親方は帝劇が樂に成ると、此夏は濱松へ買はれて行つて、それから岐阜の方へ巡業する筈だと云ふやうな話をして、序に自分が兄貴に隨いて北海道へ行つた時の經驗談を語つて聞かせた。

「一昨年の暮でした。大晦日に札幌へ乗込んだのですがね。そりあア道の酷いつたら、雪で凍つて仕舞つて私なんざ樂屋入りをするのに、途中で五六遍も滑つて轉んだ位なんです。何しろ宿屋でも鐵瓶の弦を掴んで持上げたら、下に置く時には最う手に凍り着いて離れない位ですからね。」

話の半ばで、お組は手料理の洋食を二三品運んで来て食卓の上に并べた。銀さんは全然お酒が不可いと云ふのを無理に一杯飲ませたので、顔を真赧にしながら又話をつけた。

「え、そりや澤庵なぞ漬物桶から上げて来ても、如何して庖丁ぢや切ることが出来ないぼき／＼手で折るんだと云ひますよ。」

「まい、そんなですかれえ」と、お組は感心して聽いて居る。

「だが、役者位好い商賣はないね」と、幸三は傍から口を出した。「何しろ東京に飽くと、旅へ出て、方々知らない所を見て廻つて、到る所で持て、加之お金子を儲けて来るんだからね。」

「餘り左様でも有りませんよ」と、銀さんは妙な顔をした。「私なんぞお金子が有つたら東京へ逃げて歸らうと思つたことは何遭も有りますからね。」

幸三は何と思つたか黙つて居た。

「ですが、銀さんなぞ本當に羨ましいと思ひますわ」と、良有つて、お組がしみ／＼言出した。

「如何してでせう」と、銀さんも其方を向く。

「だつて、彼様して始終お師匠さんの傍に居て叱言が云つて貰へるんだもの。」

「えへい」と、銀さんは平手に額を抑へた。「お師匠さんの叱言も始終に成ると餘り好いものぢやありませんよ。私なんぞ餘り言はれ過ぎますからね。」

「本當に怖いわれ」と、お組も小聲で言つた。少時して又「ですが、私なんぞ考へて見ると、最初好くお師匠さんへ上つたと思ひますよ。今思つても顔から火が出る様ですれ。別に傳手と云ふものもなし、い／＼今日こそはと思ひ込んで出掛けて行つても、何うも這入り難いので、彼の家の前を何度往つたり來たりしてたか知れませんよ。其間、これでは成らんと思つて、思ひ切つて這入りましたがね。それでもお師匠さんのお目に懸つて、かう／＼云ふ譯でお稽古がして頂きたいとお願ひすると、あゝ左様か、鯉さんの宅に居たのか。それぢや、兎に角明日から來ても可いと言はれた時は、本當にほつとしましたよ。」

かう言つて、少時言葉を途切らしたが、「何ですつて、れお師匠さんも一度西川へ養子に行つてらしたことが有るんですつてれえ。」

「えい、左様だつて」と、銀さんは曖昧な返辭をした。

「お師匠さんと云つたら、若い時は本當に好い男だつたつてれえ。」

お組は少時して又言葉をつけた。「あんなにお爺さんに成つても彼様に綺麗だから、若い時は嘸——」

「えい、徳な人ですよ。」

「何だと言ふぢやありませんか。私、藏前のお師匠さんから聞いたんですけれど——お師匠さんが若い時御殿へなぞ御上りに成ると、廟下の隅の衝立の蔭に侍女衆が待伏せして、下つて被入しやる時はそりや、艶書が袂一杯に入つて居るんだつて——」

「まさか」と、幸三はつい笑つた。

「えい。だつて、そりやア本當ですよ。ですけれども、お師匠さんは昔から堅かつたからそれを一つも見ないで、皆破いて棄てちまつたんだつて——」

三人は顔を見合せてにつこりした。

夏の日も町の瓦屋根に隠れて、空は一面に透徹るやうな黄橙色に光つて居た。一日のほとぼりも漸うく失せて、何處からともなく涼しい風が吹く。

銀さんはなほ二つ三つ雑談を交して居たが、未だ一軒新橋へ廻らなくちや成らんと云ふので、急に身繕ひして辭し去つた。

幸三は上框迄送つて出て、直に取つて返した。近頃客の相手に成つて長話をした後は、毎時思ひの外に勞れて居る。此日も無暗に吹かした煙草にでも酔つたのか、何うも頭の加

減が悪い。少時二階の欄干によりかゝつたまゝ、風に吹かれて居た。

だんく、夜が来て、軒燈も光を放ち出した。

やがてお組は倦る相に一段づゝ梯子段を登つて來た。幸三と並ぶ様にして、偕て物を言ふまでもなく街の上を瞰下してゐたが、

「ねえ」と、小さい聲で喚んだ。

幸三は黙つて振向いた。

「貴方はねえ、最初如何云ふ心算で私に踊を習はせたの？」

「ふいん」と、幸三は闇の中に唇を綻ばせたまゝ、何時迄も黙つて居た。

「え、知つてるのよ、私、訊かなくつても知つてるのよ」と、お組は脅迫する様に言つたが、「何でせう、貴方は私を捨てる爲に踊を習はせたのでせう。」

幸三は思はず相手の顔を見返した。が、又思ひ返して其儘顔を背向けた。

「え、左様でせう」と、女は追掛けて來た。

幸三は何時迄も返辭をしなかつた。

空の星と、街の灯と、二つながらだんく光を増して行つた。

## 名取弟子

兩國橋の袂迄来ると、前の電車に故障が有つて動かさない。濱町河岸に沿うて、幾十臺となく車臺がついて居る。氣の早い乗客は窓から覗いて見て、ぶつ／＼言ひながら諦めて降りて行く。

お長も其後からついて降りた、こんな事が無くとも、天氣の好い日には好く此處から歩いて行くのだが、何だか今日はうつとりと考へ事でもして居る様に見えた。

「姉さんも——姉さんも餘り蟲が可い。」

お長の腹ン中では、今朝出掛けに姉から云はれたことが煮えくり返つて居た、あんな事を云ふのは姉さんの僻みだとは思ふ。僻みだと思つて勘辨はして居るもの——そりや、姉妹の中で季ツ子の自分一人が甘やかされた、可愛がられた。姉さん達は清元のお師匠さんへ上つて、漸う漸う絃道が開いたと思ふ頃には止めて居たのに、自分だけは唄から鳴物から、手の廻るだけ稽古して今でも踊のお師匠さんへはついて通つて居る。踊のために両親が使つた金子は何の位だか知れない——そりや、子供の時分から方々の温

習會へも出た。温習會がなくとも、平素の付け届けやら何やら、いよ／＼名前を貰ふ迄には、本町の薬種問屋、番頭の娘の分際としては随分な物入りで有つたに違ひない。が、左様して、嫁にも行かず、うか／＼と暮して居る間に歳を取つて、加之、去年の夏阿父さんが亡くなつてからと云ふものは、そりや——そりやア自分の苦勞ツたらない。

お長は舌痛で死んだ父親の死顔を面影に見るやうな氣がした。何故死んで呉れたらう。阿父さんが死んでからと云ふものは、長い間勘當同様に成つて居た兄さんの歸參が叶つてお店へ勤める様に成つたと云ふもの、そんな風だから勿論手頼には成らず、阿母さんと二人で引取られた牛込の姉と云へば彼様云ふ女ではあり。本當に自分の力に成つて呉れるものは一人もない。阿父さんの生きての頃は皆黙つて居ながら、一旦亡く成つたと云へばさア只今踊りを止めるの、踊の師匠なぞされちや親類の者の外聞に係はるのと、頭から叩き附けられても思案に餘る。そりや女の纖弱い腕一本をたよりに、踊の師匠に成つた所で生計活計の立たないことも知らぬぢやない。知らぬぢやないが、あれだけ長く遣り通して来たものを、丸切り捨て、仕舞つて、今更何うも榎木も握りたくない。それも高慢な心からお店で世話をして下さらうと云ふ男を嫌ふのぢやない。左様かと云つて、又自分一人で遣つて行く目當がある譯でもない。自分じや何うも口に出して旨く云はれないが、只此儘

捨て、仕舞ひたくない。自分ぢや、最う如何うして可いか解らない——  
お長の心は、彼方此方駆け廻りながら、足は慣れた平常の路筋をとつて、日本橋俱樂部の側の露路を這入らうとした。

恰度向うからも一人下廻りらしいのつべりした男が遣つて來たが、にた／＼と氣味の悪い笑ひ方をしながら近寄つて、

「今からお出ですか」と軽く頭を下げた。

「へえッ」と、うつかりして居たお長は思はず立ち停つた。

「大分立込んでますよ」と云つたまい、前の男はさつさと通り過ぎた、お長は返辭を出し後れて、耳の根迄眞赤にしながら、急にしやんとして歩き出した。最う何んにも思ふまい。何でもない事に心を取られて、お稽古の時に聴でも掻いたらそれこそ仕様がな。

露路を抜けて、裏通りへ出てから左へ一町餘り、表に「井づゝ香油」と蟲ばむだ看板を下げたしまふた家の前迄來て、お長はそつと格子戸の中を覗き込んだ。成程、上り口の瀬戸物を敷いた三和土の土間一杯に、繡珍だの天鷲絨だの美しい鼻緒の吾妻下駄が亂雑に揃へて脱いである。突當りの圓い襦子窓を越えて、舞臺でする足拍子の音も聞える。

お長はぼんやり立つて居たが、やがて徐々と格子戸を開けた。土間の片隅に下駄を脱い

で、右手にある三疊の寄付で半コートコートを脱いで襦こんで下に置いた。それから又上框へ戻つて、低い抜き戸を押しながら中へ這入つた。抜き戸の中は綺麗に拭き込んで廊下だ、眞直に行けば兩便所、左へ取れば襦子窓の直ぐ背後が弟子達の待つて居る廣間で其右手一面に舞臺が見える。お長は並み居る大小の藝者や雛妓の前を抜けて、師匠の前へ出て一禮しながら、「西川玉壽」と朱が彫つてある自分の番號札を掛けて、二たび壁の側まで退いた。

「被入しやいな、此方へ」と、大きな圓い火鉢を圍んで居た年増の藝者が側へ寄つて席を譲らうとした。

「え、最う何卒、此處で澤山ですよ。」

「だつて、話が有るんだから一遍被入しやいな。」

「左様？」と、云ひながら、お長も火鉢の傍へにぢり寄つた。

不圖、眞向ひに居た若い藝者がお長の顔を見てにつこりしながら頭を下げた。

「まア染子さん、暫くでしたわれ。」

お長も禮を返しながら斯う云つた。平常見る事ぢやあるが。雛妓から一本に成る時の變り様位目に立つものはない、別けて此子は小柄な所爲でもあらうがかうして地味な物を着て肩上げを卸した所を見ると、一目には見違へる程變つて居る。それに何の子でも左様だ

が、一本に成り立てと云ふと屹度お稽古を休む。お稽古を休むばかりでなく、屹度何處が加減の悪いやうな顔をして居る。

「一寸これ、私ね」と前の年増の藝者が横合から口を出して、今日貴方が来なけりや、此儘お稽古をして頂なかいで歸らうかと思つて居たのよ。」

「まア如何して？」

「だつて」と、急に聲を低めながら、「ほら、彼の人が私の遣つてゐるものを此間上げたばかりなんでせう。だから私が出りや、屹度相方に立つてよ、彼の女の相方ぢや——全くよた計り踊るんだもの——此方が堪らないわ。」

斯う云つて、年増の藝者は大業に眉を顰めた。お長も随分な事を云ふと思ひながら、つけつけ物を言ふのが面白く思はれないでもなかつた。

「だから私の番が来たら、直に立つて呉れなきや不可ませんよ。彼女が立たない間にさ、ね、好う御座んすか」と念を押して、屹度よ。」

お長も笑ひながら點頭いた。そして、そんなに迄云はれる相手の女のうしろ姿を窺と見遣りながら、急に笑つたのが氣の毒の様な氣がして俯向いて仕舞つた。

「瓢さん、お上さんが喚んでるよ」と、奥から出て来た子役らしいのが云つた。蟲齒で上

顎の前歯がすつかり無い癖に、頭髮はちやんと兩方に分けて居るから可笑しい。

「又擔ぐんぢやないの」と。年増の女は物に動ぜぬ風をして云つた。

「左様思はれるなら、左様思つてりや可いや」と、其儘行き過ぎようとする。

「由ちやん、本當かい。」

「本當にも嘘にも、わざ／＼僕を使に寄越したんぢやないか。何だか知らないが、まア行つて見るさ。」

「はてれ、何だらう」と、頓狂な身振をしながら立つて行く、お長はそれを見送りながら不圖、廊下の月の蔭で、此方に向けて小手招きをしては拜む眞似をして居る雛妓が目についた。最初は何をして居るのかと思つたが、お長の顔を見ると、一層烈しくそれを遣り出したので、

「何？」と云ひながら、お長も座を立つて傍へ行つた。

「如何したの、若松さん。」

若松は何とも言はずに、お長の袂を掴んだまゝ、ずん／＼舞臺の裏手に當る兩便所の中へ連れて行つた。

「まア何處へ連れて行くのよう、此人は。」

「え、此處で可いのよ」と若松はやつと掴むだ袂を離した。

「さ。此處で可いから教へて頂戴。」

「何をさ。」

「私今日三番叟の上げ渡ひなのよ。偕て婚禮の吉日は——彼處の足拍子が抜けちやつて幾許如何しても想ひ出されないの。」

「ぢや、遣つて御覽なさいな。」

「偕て婚禮の吉日は、縁を結びの日をえらみ、ナン、ナンチ、チリツツン、此處の合の手ですか。」

「え、左様、左様でしたわね。」

折柄、一人の雛妓が子役に追はれてはたばたと駈けて來たが、突然若松の背後から打突かつた。若松はよろ／＼としながら、

「まア酷いわねえ」と云ふ間もなく、子役は前の雛妓を取つて抑へて、

「此奴が、／＼、隠れて煙草を喫んで居やアがる。さ、出さないか、此處へ出して仕舞はないか」と、きゆう／＼締め附けた。

「出してよ、出すから其處を離して頂戴よ」と、下に成つた雛妓は苦し相に呻いた。

やがて少し緩められた手で袂から巻煙草を出して渡すと、子役はそれを取上げて、又ばた／＼と駈けて行つた。雛妓もつゞいて駈けて行つた。

後の二人は惘れて見て居たが、不圖、われに返つて、

「さ、最一遍遣つて御覽なさいな」と、お長から言ひ出した。

「え」と、若松も氣を取直して、一緒に足拍子を踏みながら、「斯うなの斯うなの——如何も可笑しいわね。」

「え、其處は入れ違ひに踏むのよ。足をな、んばに出すのだから、一寸間が取れないのよ。」

「あ、左様でしたわね」と、若松は一人で足拍子を踏みながら、「え、何うも有難うよ。最うこれでお師匠さんにも叱られないですむわ。」

「ぢや、最う可いんですね。」

「序に、お長は一人厠へ這入つた。少時して出て來ると、若松は未だ外に待つて居て、お長の手にぶら下る様にしながら、一緒に舞臺の方へ戻つて行つた。

見ると、廊下の外れに瓢姐さんが待つて居て、にた／＼笑ひ掛けながら、

「一寸お前さん達は何をして居たの。此次が私の番だから、何處へ行つたかと思つて、他人が氣を揉んで居るのに——」

「何うも姐さん済みません」と若松が代つて返辭をした。「今ね、私が一寸三番叟を浚つて貰つて居たもんだから。」

「左様、それぢや可いけれど、前に約束がしてあるんだから、私に斷りもなしに連れて行くのは酷いれえ。」

「何うも済みません。」

「今度から氣をお付けなさいよ」と、瓢姐さんは眞面目臭つた顔をして云ひながら、三人連れ立つて火鉢の側へ戻つた。

「間もなく、子寶を稽古して居る若い藝者のぐにや／＼した踊りが濟んで、瓢の順番に成つた。瓢姐さんは一寸お長に目配せをしながら舞臺に上つた。」

お稽古は「關の扉」の下の巻、墨染が關兵衛に絡んでの口説から始まつた。

「立ち舞ふ間に落ちたる片袖、これはと墨染取り上げて、ハア、ハア、ハア。」

此泣き落しが可厭だと始終云つて居たが、それでも瓢姐さんは上手に泣いて見せた。其處へお長の關兵衛が出て、

「コリヤサそなた何を泣くのぢや」

「エー？オ、それ／＼此片袖は他所の女中さんから書いて寄越しなさんした起請で御座ん

せうがな。」

「イ、ヤそりや片袖だ。」

「イエ／＼起請で御座んせうがな。」

「ム、成程起請ぢや。」

此處で墨染の思入れあり、スツクと立つて二歩三步前へ出て、關兵衛の胸倉を執つて、「チエーお前はなア」と小突き廻しながら、「これ此様に始めから起請誓紙を取交した深いお方が有りながら、隠して置いて、又私に、色で逢ふとは能うも能う、瞞さんしたがエ、憎らしい」と成る段取である。

その墨染が關兵衛の胸倉を取る所で、當前なら一寸指先で襟に觸る位で止めるのを、何と思つたか瓢姐さんは本當にお長の胸倉を取つて小突き初めた、お長が呆氣に取られて見て居ると、につこり笑ひながら平氣で其後をつゞけて行く。

此一節の稽古を三度繰回した後で、二人とも師匠の前でお叩頭をして舞臺を降りた。

「貴方驚いて？」と、瓢姐さんはお召の羽織を取つて着ながらお長を振り回つて訊いた。

「え、驚いたわ」と、お長も額の汗を拭きながら云つた。「だつて随分なもの。」

「左様お氣の毒様でしたのれ」と、濟ましたものである。二人は又火鉢の傍に坐つた。



それから十二三番の稽古が済んで、やつとお長の順番になつた。お長は二たび羽織を脱いで袖褶みにして、壁際へ押し遣りながら、又師匠の前へ出てお叩頭をした。

お師匠さんと云ふのは、最う餘程の年配で、小形の桐の圓火鉢を抱へて、稍前屈みに成りながら、一服喫つて居たが、お長の顔を見ると煙管を下に置いて

「ありやア最う好かつたんだね。」

「はい」と、お長は二たび頭を下げた。昨日「松風村雨」の上浚ひをしたばかりである。

「左様、それぢや何か——」

何か註文でもあるかと云ふのであらう、これが藝者なら近頃お座敷で出るものと云ふ所だが、お長は只師匠の顔を見上げたまゝ、

「いえ、別に——」

師匠は少時黙つて横綴の長目な帳面を繰つて居たが、

「驚」は如何だつたね。」

「最う習ひました。」

「腕久」は

「それも——」

「左様か、それぢや「難助」の狂亂にでもするかな、ありやア仲々皮肉なものだが、矢張り通りは習つて置かなきゃアね。」

「はい」と云ひながらお長は立つて舞臺へ上つた。師匠もつゞいて立上つたが、流石に舞臺に立つと、曲つた腰もしやんとして、それが七十餘の老人とは見えなかつた。

長唄の本にしたら三行許りの所を同じく三度繰返して、

「ぢや、今日はこれだけにして置かうね」と、師匠は先舞臺を降りた。お長も扇子を片附けて、二たび師匠の前でお叩頭をして引下つた。

此時は最う大抵歸つて仕舞つた。後には四五人しか残つて居なかつた。お長は速て、羽織を引被けながら、

「皆さんお先へ」と挨拶して、其儘玄關へ出た。穿物の數もずつと少なかつた。表へ出ると、二三間はたゞと馳出したが、急に又ぐつたりとして、下駄を引摺る様にならぶら／＼と歩き出した。それでも腕車に突當りもせず、又元の露路を抜けて電車通りへ出て、平常なら其處から電車に乗るのだが、何と思つたのか反對の方角へ向けて、又ぶら／＼と歩いて行つた。

久松橋の上迄來ると、背後から「お——いつ」と喚んで居るやうな聲がした。

誰れの事かと思つて振り向くと、一人の女がせい／＼息を切らしながら馳けて來た。

「随分濟まして行くのね、あんなに呼んでるのに」と、突然お長の肩を打つた。それが瓢姐さんである。

お長は只上眼使ひに相手の顔を見上げたまい、「左様でしたか、些つとも知りませんでしたから——」

「まあ随分ね」と云つたが、急に氣を變へて、「何處へ行くのよ、今日は一緒に其邊迄歩きませうか。」

お長は只黙つて點頭いた。

二人は二三間並んで歩いて居たが、少時して又瓢姐さんの方から口を開いた。

「あのね、今日久し振りで梅吉さんが來て居たでせう——氣が附かなくなつて？」

お長は何やら解せぬやうな顔をして、相手の顔を見返したが、「左様、左様でしたわね。」斯う云つて、少時してから、

「彼の方、随分長らく見えませんでしたわね」と附足して云つた。

「丸二年振りですもの——そりや左様とあの女がね、今日私の顔を見ると突然わつと泣き出したんですのよ。」

「まあ如何して、せう。」

お長はい／＼可訝相な顔をした。

瓢姐さんの話によると、一度自分も或田舎の大盡に引かされて、二三年引いて居たことが有るさうな、身代金一萬圓と云ふので、當時は有名な話であつた。それが都合上、旦那とも別れる話に成つて、また元の新橋から二度目の積を取る身と成つた。此時、自分の出た後釜へ坐つたのが、例の梅吉さんである。自分の方ぢや、別に何とも思つて居ないのだが、先方ぢや始終氣に掛つて居たものと見えて、今度あの女が又旦那と別れて、矢張り新橋から出ることに成ると、如何しても前から遣つてる者には下手に出なけりや成らず、まさか昔の事を根に持つて虐められると思つた譯でもなからうが、何やら彼やら取交せて女心の口惜しさに泣き出したく成つたものであらうと云ふのである。

「まあ左様ですかね」と、お長は何となく身につまされて聞いて居た。

「おや最う此處は水天宮ですれえ」と、瓢姐さんは不意に頓狂な聲を出して立ち停まつた。

「全體、貴方、何處へ行くつもりでしたのよ。」

「私？」と、お長は足を留めた。「一寸本町へ廻つて歸るつもりでしたけれど。」

「そりや大變だ。これぢや餘つ程來過ぎですよ。まあ悪い事をしましたね、自分勝手な話

ばかりして——さあ被入しやいな、私が又其處まで送つて行くから——」

「可いんですよ、そんなにして頂かなくとも。私一人で歸られるから——」

「だつて、それぢや私が濟まないからさ。」

「だつて、それぢや——」

二人は少時同じ様な押し問答をして居たが、お長は強つて其處で別れることにした。そして、瓢姐さんが電車へ乗るのを見て、またぶら／＼と人形町の通りを井筒油の方へ戻つて行つた。踊りの師匠になつた所で行末の見込みもたはず、それに何時迄姉の宅に厄介に成つて居るのも心ならずとすれば、いつそ藝者にでも成つて阿母さん一人養はうかと云ふやうな心も動いた。そんな心が動いたばかりに、本町のお店へ廻つて、内々兄にだけ相談して見やうかと思つたが——今の様な話を聞くと、矢張心がぐらつく。藝者と云ふものは小さい時から眼にも見、耳にも聞いて知らぬぢやないが、あんな内幕の話を聞くと矢張り心がぐらついて極まらない。

「あい、私は如何したものかしら——」

お長は人通りの多い人形町の角に立つたまゝ、ぼんやり街の上を眺めて居た。

## しほ子

### 上

嘉久馬は病後の蒼白い顔をしながら、ふらりと病院の裏門迄戻つて來た。一寸散歩がてら新宮の通り迄賣物に行つた歸途である。炊事場の前の井戸端で、一人の見習ひ看護婦が逞ましい腕を肘の上迄石鹼の泡に濡らしながら、ぢやぶ／＼と洗濯をして居るのを見て、不圖、此看護婦に訊いて見たらと云ふやうな氣が起つた。今朝から未だしほ子の顔を見ない。昨宵あんな事を言出しただけに何うも氣に懸かる。途中もそればかり考へて來た。で、何氣なく二三歩行き過ぎて、振向きざま、

「井手さんは如何しましたかい」と云はうとしたが、何となく氣が咎めて口へ出ない、少時立つて居たが、看護婦は顔も上げず。何時迄もぢやぶ／＼と遣つて居る。嘉久馬も思ひ切つて歩き出した。運動場の砂利の中に五つ六つ飛び／＼に咲いて居る。蒲公英の頭を洋杖の尖で毟りながら行く。

支關の前へ出ると、荷車の上に夜具を敷いたのが横附けにしてあつて、傍に丁髷の爺さんが一人草鞋穿きて立つた居た。と、奥の方から瘠せこけた女の患者が、寢巻の下に浴衣の襲着と云ふしどけない服装をして、二人の看護婦の肩に捕まりながら、蟲の匂ふ様にして出て来た。此の女の顔は嘉久馬も偶に廊下で出逢つて見覚えがある。何でも新宿の女郎とか云ふことだが、自分よりも一週間程後れて同じ肋膜炎で入院して来たが、其後段々病勢は募るばかりだと聞いたのに、最う諦めて出て行くものと見える。丁髷の爺さんに手を執られて荷車の上へ乗移ると、其儘夜具の中に仰向けに倒れて仕舞つた。顔の色が透通る様に蒼白い所へ持つて来て、長い間剃刀を當てぬためか濃い兩の眉が一文字にっついて、一寸見には凄しい程美しい。何時の間にもやら醫員や看護婦達が、大勢支關へ出て物珍らし相に見送つて居た。嘉久馬も其處に佇立つたまゝ見て居たが、不圖氣が附くと、急に氣恥かしいやうな心持がして、大勢の中を掻分けながら一人二階の病室へ駈上つた。

さのみ違い路と云ふでもないが、綿入の上からぼか／＼春の日光に照されたので、しつとりと背中に汗掻いて、いやに氣味が悪い。で、部屋へ這入ると、直に窓の側へ行つて硝子戸を押上げた。生暖かい風がカーテンを帆の様に孕ませながらすつと吹込んで来る。其儘窓の柱に凭つかゝつてる様にして、少時立つて居た。

間もなく、がぢ／＼と砂利の上を軌る車の輪の音が下から聞えた。嘉久馬は眼を上げた表門の方へ出て行く荷車の後影を見送つた。それが見えなく成ると、急に窓の戸を下して背後を向けながら部屋の中を見廻した。

最う明日は自分も此部屋を出て行くのだ——三月餘り明け暮れ寝起きした此部屋を、

こんな考へが嘉久馬の心の中に湧いた。あの女と自分とは、一週間許り前後して、同じ病氣で入院したのだが、あの女は彼様して愈々容體が悪く成つて死ぬ積りで出て行くのだと云ふのに、自分は兎に角一通り病氣も癒つて、元の身體に成つて歸つて行く。これが當り前なら、是程目出度いことは無いのであらうが、一たび八王子の自家の事に考へ及ぶと——家附の妻の亂行とそれを庇ひ立てするやうな姑の心根と、主人で有りながら主人甲斐もない自分の不甲斐なさに思ひ及ぶと——あの女と自分と何方が不仕合せか分らない。思へば此正月肋膜炎の症候が有ると云ふので、此病院へ釣られて来た時は出入の者と下男との外に隨いて居る者もなく、其後も誰一人見舞ひに来るではない。一時危篤に陥つた時も、始終傍に居て呉れた者は矢張擔任の看護婦、一人であつた。其看護婦の眞心から出た介抱の甲斐あつて、漸く生命も取留めた。だん／＼快方に向ふに伴れて、自分の心は次第に其女から離れられなく成つた。傍に居る時は勿論、傍に居ない時でも、自分の心は始終其女

の行く所へ行つて居るやうな気がした。最早自分は其女を離れて自分の未來を考へることは出来ない。

其女の名は、井手しほ子。いよいよ退院の日が極つた昨夜に成つて、嘉久馬は到頭心中をしほ子に打明けた。八王子の家は亂脈はかぬと話し通つた通りである。それを思ふと、自分は二たび養家へ歸る氣はない。殊に此病院へ來て、たとへ百日足らずの間でも、暖かな人情の籠つた手に看護られる嬉しさをおぼえては、二たび彼の荒んだ陰氣な家へ歸つて行く氣には成れない。で、しほ子さへ承知して呉れるなら、自分は、此儘家へ戻らないでも可い——二人で行ける所迄行つて仕舞ひたい——と。

しほ子は只黙つて聽いて居た。返辭のないのは不承知かと訊れても、いよいよ俯向くばかりで物を言はぬ。それぢや、家を捨て妻子を捨て、他し女と一緒に走らうと云ふ自分を見下げ果てた男と思つてか、それなら其様に明らさまに言つて呉れと迫つた時、しほ子は膝を見詰めたまゝ、口の中で、何卒明日の朝迄返辭を延ばして呉れ——今夜一晩落着いて考へたいからと、途切れ〜に言つた。

「ぢや、明日の朝迄？」

「えい、屹度——」

しほ子は堅く點頭いた。男が落膽した様に眼を瞑つて枕の上に頭を落すと、少時其顔を見詰めて居るやうであつたが、つと立上つて、つか〜と廊下の外へ出て行く。眼を開いた時には、もう女の姿は重い扉の蔭に隠れて見えなかつた。

嘉久馬は其時の光景をまざ〜と眼に見る様に思つた。それ限り女は顔を見せない。明日の朝と云つた今朝に成つても——午前の回診の時にも、外の看護婦が代りに來て、到頭しほ子は顔を出さなかつた。如何したのか、何と思つて居るのか——しほ子は何を爲て居るのだらう。

嘉久馬は背後から突飛ばされた様に窓際を離れた。いきなり入口の扉の所へ行つて、把手に手を掛けたが、又思ひ返して部屋の中央迄戻つて來た。そして寢臺の端に腰を卸したまゝ、がつくりと仰向けに倒れた。天井も眞白に見える四圍の壁も眞白に見える。毛布も藁蒲團も、何も彼も眞白な中に自分一人が手も足も眞黒な様に見える。

併し自分はその女にわれから罪の子に成れと迫つて居るのではないか——妻ある男と通ぜよと。

嘉久馬は自分で考へて自分でひやりとした。勿論、自分で妻が有らうとも家が有らうとも思つて居ない。そんなものは自分には無い。況してこれから家を捨て妻を捨て、出て

行く者に、そんなものゝ有らう筈がない。其間の苦しい事情はしほ子も知つて居て呉れる。知つて居て、同情して呉れるものと思へばこそ、今度の様な事も言出して見たのだけれど——自分には、最う此上考へる力も如何する力もない。

ぐるりと寢返りを打つたまい、嘉久馬は靜乎と身動きもせず居た。半時間程経て、むつくと頭を上げたが、敷蒲團の上を手探りにニツケル側の懐中時計を引寄せて針の在所を見定めた。それから急に遽に遽に出して枕元の小さい卓の上から水薬の瓶を取つて、二三度横に掉りながらごくぐくと飲下した。そして目の前に飲み差しの瓶を持つて来て、日光に透して見て居たが、やがてそれを元在つた卓の上へ返さうとして、不圖、其處にある散薬の袋の下に一封の手紙の人目に觸れない様にして置いてあるのが眼に留つた。一目見たばかりでわなわな戦へながら手に取つて見ると、上書は只「成瀬様」とのみ、裏返して見ても差出人の名は書いてない。くわつと逆上るやうな心持がして、眼を瞑つたまい、いきなり封を切つた。二三十行は電光の様に眼を走らしたが、つと手紙を抛り出したまい、枕の上に俯伏せに成つた。

少時して、嘉久馬は二たび前の手紙を取上げた。又、最初からそろ／＼と読み直して行く。

宥して下さいませ。嘉久馬さま。何事も私が悪う御座いました。貴方の御口から今夜の様な言ひにくい事を云はせたのは悉皆私です。私が云はせたので御座います。私は貴方の前に坐つて、貴方の御聲を聞きながら、お言葉の一つ一つが悉皆私に代つて云つて下さるやうな氣がして居ました。私の心が貴方に通じて、私に代つて云つて下さるのだと思つて居ました。如何云ふものか、始めてお目に懸つた時から他人の様な氣がせず。外の人達の分迄引受けて、成べく御側に隨いて居る様にしました。一時大變お悪く成つた時なぞ、女の眞心を盡すのは、かう云ふ時を措いて外にないと、私は結句嬉しい様にも思ひました。それでも一心が届いたと見えて、だん／＼御體が回復するにつけ、私の心は——今から思へば、私は其時分から今日あることを心の中で願つて居るに違ひない。今日の様な、お言葉を頂く日を今日か明日かと待つて居たに違ひない。私はそんないたづら女で御座いました。何卒お宥して下さいませ、それ程思つて居ながら、愈々今日の様なお言葉を伺つても、直様「はい」と申上げること出来ず、一時逃れの事を言つて下つて参りました。私の苦しい胸の中を思ひ遣つて下さいませ。あれから——私は夢中で自分の居間へ走せ戻つて朋輩が出て居ないのを幸ひに、窓の側へ椅子を引寄せて坐つたまい、一人で泣けるだけ泣いて居りました。窓の硝子越しに凝乎と戸外の闇を見詰めて居ると、ほろ／＼と涙が出る。

幾許拭いても拭く後から又留度もなく出て来る私は何時間位泣いて居ましたらう。左様して居る間に、だん／＼涙も納まつて、大風の吹いた後の様に心も落着いて参りました。私はいふ／＼筆に書いて御返辭をいたすことに決心しました。夜は最う一時を過ぎて居ます。夜が明けても書いて仕舞ふつもりで御座います。それにしても何と書いたら可いか。何と書いたら私の心が通じやうか。私は最う云ふことも書くことも知らない。

只一つ——生れて二十六年の間、誰にも云はず、私一人の胸の中に秘めて来たことがあつた。私の身の上については、たび／＼お話もしたし聞いても頂いた。あれが間違ひだと云ふのではない。あれが間違ひではなけれど——あれだけ打明けながら如何しても打明けて云へなかつたことが一つある。今は思ひ切つて、それを云ひますから、何卒それを私の返辭だと思つて下さいませ。そして、何事もひろい御心に思召し宥して下さいませ。

私は信州飯田のもので御座います。これは幾たびも御耳に入れたこと——生れは飯田ですが、育つたのは父の生れ故郷、美濃の國境で石山と云ふ山の奥の小さな村で御座いました。其處に十五の眷迄居つたのです。人傳に聞いたのですから能くは分りませぬが、父は近在の名主の家から母を娶つて間もなく、親類中の留めるのも肯入れず家屋敷を禊んで、飯田の街へ出て宿屋を開業したと云ふことでした。慣れぬ業とて、最初は側の人達も危ぶん

だか、とん／＼拍子に都合好く運んで、家業は日増しに盛大に成つて行く。一時は諸國にも名の聞えた旅館の一つに成つた相で御座います。それなら申分は無いやうなものです。内向きが樂に成るに伴れて、父はそろ／＼地金を出して、母が参つてから暫らく慎んで居た放蕩を二たび始める様に成りました。一つは母が始終病身であつた所爲も御座いませう。それにしても、私が母の胎内に宿りました頃は、妾宅の三軒も有つて、父は殆ど自宅へとては寄附かず。店の事は一切痺弱い母が女の手一つに切廻して居たと云ふことです。そんなこんなで心を痛めた爲か、

私が生れる時は、それでなくとも初産の生命にも係はる程むづかしく、やう／＼身二つに成つてからも、長らく病院へ入つて居たさうな。それから一家の運の廻合せが悪く成つたと見えて、稼業も思はしくなかつたのか、同じ年の冬、折角賣込んだ旅館も他人に譲つて、二たび生れ故郷の石山へ引込むことに成りました。

私の物心が附いてからおぼへの有るのは、此石山の家で御座います。何でも一旦人手に渡つた屋敷跡を買戻して、新に普請をしたとやらで、ひろい地面の片隅に軒の低い瓦葺の小家が建つて居ました。其小家の中に、私は父と母と、町から隨いて来た跛の乳母との四人で、他所目にも寂しい月日を送つて居ました。私が知る様に成つてからの父と云ふもの

は、年中むつとりとして、無口な笑ひ顔一つ見せたことのない人でした。用事の外には、誰とも口を利かないが、殊に母とはついぞ談話をしたのを見たことがない。母の方でも、父の前へ出るとちり／＼して小さく成つて居ました。尤も、家事向きの事は母が取路つて居ましたが、年の暮と盆との二季に極つた額の小使ひ錢を渡されるだけで、其後は幾許差追つた入用があつても、一切構ひ附けられない。それが爲に母は何れだけ泣かされたか知れないと云ふことです。父はと云ふと一間に、閉ぢ籠つたまゝ、朝から晩迄錢勘定ばかりして居ました。そして、食事も居間へ運ばせてする。其後で、毎時私と乳母とが一緒に喫べましたが、母は如何しましたらう。私は一度も母が膳に向つたのを見たことがないと云つても可い位でした。私の母はそんな、可憫相な人でした。始終おど／＼して眞當面に相手の顔さへ見ることの出来ない——何か知ら目に見えぬ黒い影に惱まされて。それを避けやう／＼として居るやうな人でした。勿論、父は私に向つて優しい言葉一つ掛けて呉れたこととはない、が、母にしても——そんな事を云つたら不思議に思召すかも知らぬが、私は嘗て一度も——あゝ唯一度有りました。後にも前にも其時を外にして——母の手に抱いて貰つたおぼえが無い。それで居ながら、如何かすると私一人遊んで居る所へ来て、頭の上から凝平と私を見守つて居ることがある。そんな時には、私は顔を上げて見ないでも、母の

悲しさうな、遺瀨の無い眼元をまぎ／＼と目に見て居ました。で、忪へられなく成つて、わつと泣出しながら抱附かうとすると、母は顔を背向けたまゝ、兩手で押戻して、其儘ずつと向ふへ行つて仕舞ふのが常でした。そんな事が度重なると、子供心にも、其裏には何か深い譯があるやうな氣がして、だん／＼母の後も追はなく成りました。かうして私は兩親の愛と云ふものを知らずに育つたので御座います。それで頼む木蔭と云へば、生れた當座から世話をした呉れた乳母一人を杖とも柱とも——何事ぞあれば袖の下に隠れる様にしてやう／＼生きて來ましたが、其乳母とも別れなければ成ぬ日が參りました。

恰度私が、七歳の時でした。委しい譯は知りませぬ。乳母は眼を泣き膨しながら、一人で行季を縛つたり。大きな風呂敷包みを拵へたりして居て、私が側へ行つても毎もの様に相手に成つて呉れません。如何したのか訊いても返辭もいたしません。そして其行李や風呂敷包みを持出して、一寸母に挨拶したまゝ、とつとと出て行くのです。これは屹度置いて行かれるのだと思つたから、私は一生懸命に後を追はへました。泣いて／＼、誰が何と云つても肯かなかつたことを今でもおぼえて居ます。で、乳母も止むを得ず脊中に私を貰つて、村境の崖下の地藏尊迄行つて、其處に私を遊ばせて置いたまゝ、何時の間にか私を隠して仕舞ひました。私は一人で泣きながら、何時迄も／＼其處に待つて居ました。日



が暮れて寒い風が吹出しても、自宅へ歸らぬので、村の人に連れに来て貰ひましたが、明るる日も同じ所へ行つて見ました。が、乳母は其儘とうとう歸つて参りませんでした。

それからと云ふもの——私の家には最うかけら程の火の氣も残つて居ない。父は相變らず洗面をつくつて居る。母は母で、始終おどろしなからやうく其の日々々を送つて居る。只一人私のために袖垣と成つて縁の下から吹上げる様な冷たい風を防いで呉れた乳母も居なく成りました。私のたよる所は一つもない。餘り堪へられない時には、そつと家を脱げ出して、例の崖下の地藏尊へ行きくしました。子供心に、其處に待つてさへ居れば何日かは乳母が會ひに来て呉れるものと思つたので御座いませう。たびく其處へ遊びに行く間には、途中で不圖畑を見廻りに出た父と行き逢ふも有りました。そんな時には、私は遽て、路傍の茨の蔭なぞに隠れて遣り過すのが常でした。先方ではそんな氣も附かないのか、兩手を背後で組んで、一足毎に頭を左右に向けながらのそりくく行く。私は一生懸命に息を凝らしながら見て居ました。あの身丈の高い面長な、ところく頭筋に斑の入つた老人が——あ、父は未だ老人と云ふ年配ではなかつたのですけれども——ふいと私の隠れて居る草叢へ目でも附けやうものなら、私は今にも捕つて喰はれるかと思ふ程怖かつた。これは何日からとも分らない——何日からとも分りませぬが、だんく物心の附

くに伴れて、私は此人から可愛がつて貰へぬばかりではない。如何かすると憎れて居る——と云ふやうな氣がして参りました時には本當の親子ぢやないと云ふやうな——

そんな中にも、月日に關守なく、私は九歳の春を迎へました。此歳迄學校へも上げずに打捨つて置かれたので御座います——尤も、田舎では珍らしい事でもないのですけれど。で、村の小學校へ通ふ様に成つてからは、いくらか日蔭の蔓が日向へ出されさうな心持もしましたが、それもほんの學校に居る間だけで、私どもの單調な生活には何一つ變つたこともない。家の中に籠つた空氣はだんく陰氣に成つて、だんく息苦しう成つて行く、殊に母は兩の肩に背負つた重荷に堪へないで、年々前へ屈んで行く様に見えました。私と母との關係程不思議と云へば不思議なものはない。母はつとめて、私を避けやうとする、手さへ觸れまいとする、時には本當に私を憎んで居るのぢやないかと思はれるやうな事もある。それで居ながら、私は母が心の底で私を愛して居るのだ——私一人を手頼りにして居るのだと云ふことを信じて疑はなかつた。夕暮れ時、うそ寒い臺所の板の間に、二人目を見合せながら黙つて坐つて居ると、私は何とも云はれぬ悲しさが込上げて来て、

「阿母さま、何故そんな悲しい顔をして被坐しやるの」と、訊いて見たかつた。

それでも返辭をしないから、

「何故、何うして私達はこんなに——」と、疊みかけて訊きたかつた。

あい、「何故」と云ふこと、「何うして」と云ふこと位、小さい時から私の胸に喰入つた私の心を惱ましたものはない。それでも——それ位に思ひながら私は一度も面と向つて訊くことを得せなんだ。何時かは母の方から打明けて呉れるだらう、さうしたら私は私の心の中に思つて居ることを云つて仕舞つて、二人とも心底から打解ける日が来るだらうと、そんな當にも成らぬ事を心頼みにして——

ある日學校から上つて来て、そつと自分の居間へ入らうとすると、急にどさ／＼と襖にでも突當つたやうな物音がして、ひ——と云ふ女の泣聲が聞えて参りました。私は吃驚して少時間耳を立て、居たが、何うも泣聲が母らしいと思つたものですから、前後の考へもなく奥の間へ飛込んで行きました。見ると、父は拳を握つたまゝ室の真中に突立つて、其足許に母が泣倒ふれて居るのです。二人とも何か言ひたさうにしながら、相手の氣合を計つて物を云はぬ。私は只飽氣に取られて、片身代りに二人の顔を見較べた。私の顔を見ると、父は見る／＼眞蒼に成つて、二歩三步踰跟きながら背後へ下つた。私には何事とも解らない。解らない儘にわつと、聲を立てながら、母の背中に取纏つた。

「おしほ」かと云つて、母は矢庭に私を抱寄せたが兩手で引抱へたまゝつと立上つた。そ

して逃げる様に其室を出て、私の居間へ連れて來た。其處で、膝の上へ私を抱上げながら何時迄も泣いて居まして、私は此時始めて母に抱いて貰つたので御座います。母の膝に抱かれながら、私も一緒に成つて泣いて居た。併し何時迄経つても母は何とも、言はない——恐らく何とも言へなかつたので御座いませう。私も何んとも言はなかつた。「何故」とも「如何して」とも訊かなかつた。最う訊かなくとも可い、訊かなくとも解つてゐるやうな氣がしたので御座います。少くとも訊いて悪いやうな氣がしたので御座います。昔から不仕合な家に生れた子供は、そんな智恵が早く附くと申しますが——私も其の一人で御座いました。

明くる日から又元の通りで、別に變つたことも有りませぬ。只、畑中の小徑なぞでは、ふつつりと父の影を見掛けぬ様に成りました。尤も、そんな事に氣が附いたのは三箇月も経つた後のことでした。そして、其頃には本當に床を離れられぬ身に成つて居たのです。私は日頃病氣なだけに、父よりも母の方を案じて居ました。私を生む時にも殆ど死にかけたと云ふことでしたし、それから始終あゝでしたから、左様思ふのも無理ではありますまい。ところが俄に父の方がいけなく成つたので御座います。左様成つてからは母は父の居間に付き切りに附いて居ましたが、父の方では母が其處に居るかとも思つて居なかつた様

でした。寢返り一つ打つにも他人手を藉る身に成つて居ながら、未だ自分の身の廻りの事だけは自分一人で爲やうとする。で、如何も成らぬ時には、

「乳母や」と、暖れた、併し底力のある聲で喚ぶのが常でした。あい、未だお話することをお忘れしましたが、父がどつと床に就く様に成つてから、大工の兄の家に食客つて居た乳母を二たび喚び寄せて面倒を見て貰ふことにしたので御座います。そんな時には、私は窺と乳母の背後に隠れて父の臥て居る座敷の椽側迄行つて見ることが有りました。一度怖々なから座敷の中を覗き込むと、壁に片寄せて敷いた薄團の上に、眼が落ち凹んで、鼻が尖つた、全然色の黒い人形の毛を引撈つたやうな病人が仰向けに成つて臥て居るので御座います。——私はきやつと云つて飛び退いた。そして其邊の戸や障子に突當りながら戸外迄逃出したので御座います。私は一生の間に、あんな怖ろしい相恰の變つた病人を見たことがない——

半年許り煩つて居て、父は到底此世を去りました。長の看病の勞れと、それから十年此方張詰めて居た氣の弛んだ所爲か、母は一時失神したやうな状態に陥入つて、お葬會の日にも、何が何やら分らぬやうな風でした。村の中には、昔から親類が幾軒もありましたが、いづれも父の生前中往來をしなかつたので、父が死んだと聞いても集つて來ない、やつと乳

母が一軒々々に頼んで歩いて來て貰ひました。がや／＼と打揃うて遣つて來て、わめいたり怒鳴つたりしながら、何うやら斯うやら野邊の送りも濟まして呉れました、其跡片附けやら何やらで、二三日は大勢集つて飲み喰ひして居ましたがやがて一通り濟んだと見えて大波の引いた様に歸つて行く。

私達はまた女三人に成りました。一週間許りで母の麻痺状態は去りましたが、始終うつら／＼として、一向私達に話を仕向けるでもなく、暇さへあれば寺參詣をして居ました。偶に後から隨いて行くと見ると、眞直ぐに本堂へ上つて、がらんとして人氣のない勾欄の前に坐つたまい、一時間でも二時間でも頼づいてゐる。私が側へ行つても、全然氣が附かない。そして、入相の鐘の鳴る頃、口の中で念佛を唱へながら、とぼ／＼と野中の徑を歸つて参るので御座います。それを見ると私はたび／＼何とも云はれぬ奇異の感に打たれた。あい、母は亡くなつた父を思つて居る——生前あれだけ酷い目に遭ひながら、矢張母は心の中で亡父を愛して居たに違ひない——

ある日、母が寺詣りに行つた留守の間に、私は乳母を手傳つて、二人椽側で日向ぼこりをしながら、里芋の皮を剥いて居りました。三年前には、此の世に乳母さへ有つたら何も要らぬと迄思ひましたが、今は左様も行かない。兎もすれば、私の心は側に乳母が居ると

云ふことさへ忘れ勝に成つて行く。すると、不意に向からこんな事を云ひ出したので御座います。

「おしほ様、お前さまは亡く成つた先の旦那を何と思つてぢやなも」と。

私は只相手の顔を見返した。少時して、

「何と思ふかつて、如何？」

「本當の阿父様ぢやと思つてかなも。」

私は只黙つて居ました。無教育の女は、何の顧慮もなく、やす／＼と一大事を打開けたので御座います。乳母の云ふ所に據れば、父は戀女房として母を貰つた。一人の女の兒ではあるし、他所へは出したくないと云ふのを、強つて連れて來たので、其當座は一にも一にも母で無うては氣に入らず。近所の目に立つ程仲の好い夫婦で御座いましたさうな。が、それも慣れれば何んとやらで、一時飯田へ出て旅館を營んだ頃には妾の三人も圍つて置いて、内を外の放埒三昧——其間に私が出来たので御座います。他人から見れば、別に不思議はないやうなものです。一人晴れ遣らぬは父の胸の中でした——如何しても私と云ふものゝ出る筈がない。それ程父は母を打捨つて置いたので御座います。勿論、幾許打捨つて置かれたとて、そんな大反れたことを仕出かすやうな母ではない。そんな母ではないが

事實は事實である——如何することも出来ない事實である。父は惑ひもし疑がひもした。果ては氣も狂はむばかりに走り廻つた。即座に三人の妾も放逐した。併し如何しても母を離別する氣には成れない。又、此儘同棲する氣にも成れない。其間、母は病院で死にかゝつて居たのです。父の顔を見るたび、只宥恕を乞ふやうな眼元で見詰めながら、何とも言はない——そして日に／＼衰へて行く。それを見ると、父の心は尙更極まらない、左う右うする間に、私が生れたので御座います、——逆も助かるまいと、思つたのが、母子とも不思議にだん／＼肥立つたので御座いますさうな。一旦自宅に引取りましたが、こんな事は人の口端にかゝり易いものと見えて、彼處の家に今度生れた子は主人の本當の子ではない。何時ぞや縣廳の役人が出張して來て長く逗留したことがあつたが、旅のつれ／＼の出來心から、ある夜若い主婦さんを捕まへて無理無體に手込めに合せたさうな、大方其時に出來た罪の塊だらうなぞと云ふ噂が立つた。それが父の耳に這入つた時には最う堪らない。俄かに一家を纏めて、山の奥の生れ故郷へ上げ越すことに相成りました。それから後の事は二たび繰回す迄もありますまい。只、父は到頭母を離別しなかつた。そして、私も——私も側に置いて呉れたのであります。

あゝ私は父の子ではない。井手の家に對しては、何一つ要求する權利のある者ではない

が、それを聞いても、私は格別驚きもしませんでした。如何かすると、そんな話は前から知つて居た——前から自分の思つて居た通りだと云ふやうな氣もして、靜乎と俯向いて八ッ頭の皮を削りながら、お終ひ迄乳母の話を書いて居りました。

併し夜に入つて床に就いてから、大變覺されたことを今でも覺えて居ます。今思つても病院の一室に仰臥したまひ、身と心との懊惱に勞れて、一刻々々死を待つて居る若い母の姿がありくと眼に浮く、私は其母の胎内に居たので御座います。あゝ私さへ無かつたら、切めて生れぬ前に死んで呉れたらとは、父も思ひましたらう、母も——母も思つたに違ひない。私はかうして生みの母に迄呪はれながら此世へ出て來たので御座います。私が初めて此世の光に觸れた時、父は何んな憎しみの眼で私を見ましたでせう——其憎しみは父の死ぬ迄つゞいた。母は母で、私の顔を見るたび過ぎ去つた夜の怖ろしい夢を思出さず居られなかつたでせう。一家の災禍を齎したものは私でした。私の身體の中に災禍の原因が結晶して居るので御座います——あゝ、私は最う堪らない。

父——私の肉體と生命とを與へた父については、一度も考へて見たことがない。何處の誰でも可い、生きて居ても死んで居ても構はない。私とは他人です。未來永劫他人です。嘉久馬様、私が貴方に打明けると云つたのは、これでしたこれを打明けた上は、後は大

急ぎで書いて仕舞ひます。父の一周忌が過ぎて、間もなく母は父の後を追ひました。生きて居る間から殆ど死んだも、同様でしたから、これには別に變つたこともない。只、私もこれで此の世の中に一人ぼつちの孤兒と成つたので御座います。それに別段貯へともない。父は生前錢勘定ばかりして、居た様ですが、死んだ後で金櫃の中を檢べて見ると、これと云ふ程の纏つた金子はなかつた相でした。で、外に手頼る所もありませんので、暫らく乳母の兄の家に厄介に成つて居ましたが、十五の歳に縣立病院看護婦見習生の募集に應じて、長野の市へ出ました。ずつと其處に續けて勤めて、此方へ參つたのは一昨年暮で御座います。

私が看護婦になりましたのは、只女一人獨立して行かれるやうな活業をおぼえましただけのこと。女の身で獨立なぞと申しましたら生意氣なと思召すかも知らぬが、私には、此外に仕様がなない。一旦父母の秘密を知つてから、私の父母を見る眼は變りました。それに伴つたので御座います。それが貴方のお目に懸つてからぐらついた——ぐらつきながら、なほ御意に従はれない譯は、委しく申さずとも、私が貴方の前に打明けた身の上で察して下さいませ。そして、私の事は何卒此儘にこれ迄通りにして置いて下さいませ。

何時の間にやら夜も明けました。長い手紙も此處で筆を擱きます。何卒御覽に成つた上は、人目に觸れない様に火中して下さいませ。そして私の事は其儘忘れて頂きたいなぞとは申しませぬ。不寐ながら、切めて御心の片隅になりとも、何時迄もおぼえて置いて下さいませ。そして、折節はこんな女も有つたかと想出して下さいませ。

私は此命のある限り貴方のことを忘れませぬ。左様なら——嘉久馬様、左様なら。

四月廿三日夜の明方

しほ子より

成瀬嘉久馬様

御前に

嘉久馬は最後の一句に眼を留めたまひ、凝乎と考へて居たが、やがて両手で長い文殻を懐の下へ掻寄せる様にして、がつくりと頭を枕の上へ落した。顔の色は水でも浴びた様に眞蒼である。

下

午後の廻診の時間が来た。嘉久馬はそれ迄寢臺の上に俯伏せに成つたまひ、身動きもせず居たが、急に起上つて耳を欬てた。ぞろ／＼と醫員や看護婦の廊下を歩く足音がして、此方へ近附いて来る様子である。不圖、それが止つたかと思ふと、一つ置いて隣の病室へ這入つた。

あい、しほ子が居る、彼の中にしほ子が居る。嘉久馬は何がなしにそんな氣がした。今に此部屋へもしほ子が遣つて来るかと思ふと、譯もなく胸が轟いて、そつと懐の上に當てた——しほ子の手紙の這入つて居る懐の上に、併し此部屋へも来て呉れるだらうか。此手紙を読んだと知りながら、此部屋へも遣つて来るだらうか。午前の廻診の時には代りの女を寄越して顔を見せなかつた。併し現に隣の部屋迄来て居るものが——

又、どや／＼と足音がして直ぐ隣の病室へ這入つた。何かの拍子に、不圖しほ子の聲がした。嘉久馬は懐の手紙を手文庫の中へ隠さうとして立上つたが、それを聞くと、急に足が立縮むやうな心持がした。二たび聞えたかと思つたが、最う聞えない。そこへ一人の若い看護婦が入口の扉を開けて、

「あら、起きて被坐しやるのですか」と云ひながら這入つて来た。そして、其邊を取片附けて副院長を待受ける用意をした。嘉久馬は寢臺の上に仰向けに成つて、つとめて平氣な

顔を装つて居た。

やがて、四五人の醫員や看護婦がどや／＼と這入つて來た。副院長は眞先に立つてにこにここと笑ひ掛けながら、

「成瀬さん、今日は如何ですか」と、側へ寄つて脈を取りにかゝつた。嘉久馬は副院長に左の手頸を任せながら、そつと背後に立つて居るしほ子を見た。しほ子は身丈のすらりとした、色の淺黒い女であつた、二人の眼が合ふと、しほ子は一寸不安相な色を見せたが直に又元の引緊つた顔色にかへつた。嘉久馬は戸惑ひしたやうな心持がして、眼を反した。

「これぢや、お花見が出来ますね」と冗談を言ひながら、副院長は嘉久馬の手頸を離して衣囊から聴診器を出しにかゝつた。それを見ると、しほ子は嘉久馬の側へ寄つて寢巻の胸をひろげた。大きな手ではあるが、其指が極めて長い。それから體温表を取つて見せたり病床日誌に記入したり、一人で甲斐々々しく働いた。只、最後迄一言も口を利かなかつた。そして副院長の後に隨いて出て行つた。

皆衆の出て行つた後で、嘉久馬は一人仰向けに成つたまゝ、眼を閉ぢて居た。やゝ有つて、不意にむつくと起上つたが、手文庫から前の手紙を取出して來て、一語づゝ寢がなら

讀み返した。長い長い間かゝつて、讀み返した。春の日永の太陽もやう／＼西に傾いて、何處からともなく櫻の花瓣がひら／＼と窓を掠めて散つた。一片。又一ひら——

其時、音もなく入口の扉が開いて、しほ子が窺つと顔を出した。外に誰も居ないのを見定めて、室の中へ身體を入れて扉を閉めやうとした時、

「井出さん」と、大きな聲で喚ばはりながら、廊下を駈けて來るものがある。しほ子は把手を握つたまゝ思はず顔を蹙めた。

「井出さん、何處に被坐したの——人がこんなに搜してゐるぢや有りませんか」

後から來た看護婦は室の中へ這ると、しほ子に向つて、突然左様云つた。

「何か用でしたか」

「えい、用ぢや有りませんが——用の無い時、井出さんの側へ行つちや悪いんですか。私の方で會ひたくて／＼仕様の無い時にも——

「まア如何しませうれえ」と、しほ子は爲う事なしに笑ひながら、「何卒、何時でも被入して下さいませ。」

「だつて——成瀬さんに御用が有るんぢやないの。御用が有るんでなけりや、私も些との間話して行くわ。」

「何卒」と、しほ子は二たび頭を下げた。

嘉久馬は二人の話聲を聞いて、漸くわれに歸つたが、そつと手に持った手紙を懐へ隠して、

「さ、此處へお掛けなさい」と、椅子を差出しながら、自分は二たび寢臺の上へ這ひ上つた。椅子は一脚しかない。

「井出さん、お掛けなさいな。」

「まア貴方から——」

「私は此處で可いのよ」と、一人の看護婦は寢臺の端に腰を掛けながら、「今朝のお女郎は如何しましたでせうねえ。最う自家へ着いたでせうか。」

「何かい——ありやア如何したんですかね」と、嘉久馬も返辭の仕手がないので口挟んだ。

「えい、何でも栗橋在のものですとさ。随分流行つたお女郎だ相すでけれど、あんな病氣に成つたものですから、逆も癒らぬものと樓主の方でも見込みを附けて、證文を捲いて遣つたんですつて——それで、身體だけ連れて来いと云つて遣つたら、阿爺さんがわざ／＼荷車を引いて迎ひに来たんですつて——随分可憫相ですわね。」

「ふむ」と、嘉久馬は思はず溜息を洩らした。少時して、「何ですかい、そんなに悪かつた

んですかね。」

「えい、最う不可ないでせう。醫局では、栗橋迄歸る間保たないだらうと云ふ話でしたよ。」

嘉久馬は返辭をしなかつた三人とも少時黙つて居た。そして、三人とも別々の事を考へて居た。

「あら、誰か喚んでるよ」と、其看護婦は急に耳欝た。「私ぢやないか知ら」と立上つて、入口の扉を明けて覗いて見たが、左様なら、「お喧ましう」と云ひながら、ばた／＼と廊下を駈けて行つた。

後は二人と成つた。二人よも、又少時何とも言出さなかつた。

やゝ有つて、しほ子は椅子を離れながら、「今朝の——今朝の手紙を讀んで下さいましたか。」

嘉久馬は枕の上に俯伏せに成つたまゝ、微に點頭いて見せた。

「あれで承知して下さいましたでせうね。私の心の中も——お分りに成つたで御座いませうね。」

嘉久馬は何とも言はない。何時迄待つても何とも言はない。



しほ子は凝乎と男の容子を見詰めて居たが、つかくと側へ寄つて、横顔を覗き込む様にしながら、

「如何爲さいまして、え、如何か爲さいまして？」

嘉久馬は急に頭を上げたが、つとしほ子の手を執つて脇の下へ掻込む様にしながら、指の尖を唇に當てた——何時迄も、何時迄も離さない——しほ子は其手を引くだけの力が無かつた。そして片手に顔を抑へながら、ばたり、ばたりと涙を落した。床の上に冷たい大粒な涙を。

## 伊勢詣

### 一

「ぢや可いかえ。後で又あの時阿母さんが一人であんな事をして仕舞つたと言はれても、俺も切ないでない。それで呉れども言つて置くのぢやが、本當にお前も承知してお呉れたのぢやない？」

かう言つて、阿母さんは私の返辭を待つ様に首を傾げた。私は好く阿母さんの言ふことが解らなかつた。勿論言つてゐることは解るが。何の爲にそんな事を言ふのか、十一の私には好く腹へ落ちなかつた。で、少時相手の顔を見返して居たが、

「あ、好いよ。」と言つた。

「左様かえ、それで俺も本當に安心したわえ。」

阿母さんはさも嬉し相に、いそ／＼として、二人が喫べた後の膳を仕舞ひにかゝつた。實際、私の阿母さんと云ふ人は左様云ふ人で有つた。わが子にも氣を兼ねて戦々して居

るやうな、圖々しいやうな、何だか得體の分らない女で、我儘は通したが、自分一人と思ひ切つて遣り通すことは出来ない。で、十や十一に成つたばかりの頑是ない子供に相談を掛けて、責任を殞たうとする。それで又安心の出来るやうな女で有つたらしい。

で、其相談と云ふのは私の家に食客を一人置かうか如何せうと云ふ話で有つた。

私は春五月父親を失つた。一昨年、の暮祖母が死んだ時、村の人がお葬ひに寄つて來たのを見て、心から喜んで跳ね廻つた程に無邪氣でもなかつたが、矢張未だ譯は分らなかつた。阿母さんはそんな者を相手に手頼ない月日を送つて居た。それに——私の家は代々村の百姓なんだけれど——親爺が死んでから、何となく他所者扱ひを受けて居た。阿母さんが他國の者だと云ふやうな理由も有らう。他國から後妻に來て、子供を一人生んだだけで、十年経つか経たない内に其家を横領して仕舞つた——位に考へて内々快からず思つて居る親類も有つたらしい。兎角に、元からの親類は餘り私の家へ寄り附かなかつた。

「あの人達は内々自宅の身代に目を着けて居つたのに、お前といふ子が出來て、的が外れたもんぢやで、それを根に持つて居るんぢやぞえ。」

阿母さんは私を捕まへて、好くこんな事を言ひ——した。他所から歸つて來た時なぞ——阿母さんは私一人留守をさせて置いて、方々出歩くことが所好で有つた——不意に私を抱

へて頬擦りなどしながら、

「最う／＼何處へも行くこつちやない。堪忍してお呉れえ、堪忍して——本當にお前と俺と二人ぢやでない。」

かう言つて、阿母さんはぼろ／＼と涙を瀉した。少時左様して居るかと思ふと、やがて小さな聲で、

「お前も早う大きく成つてお呉れえ」と、染み／＼言つた。

私は阿母さんの脊中へ兩手を廻して獅噛み着く様にした。二人はかうして二三時間も黙つて居ることが有つた。が、私は如何いふものか、其頃から阿母さんと一緒に成つて泣くことが出來なかつた。阿母さんは、「敵の中だ」と言ふけれど、別にそんな氣もしなかつた。又好く他國者と言はれるのを口惜しがつて、出入りの小作の婦衆など手懐けて、近所合壁へ聞えよがしに、大聲に自分の生れた在所の話をして居ることが有つた。私は子供心にも、それが可厭で、成たけ避けて聞かない様にした。

實際、私の阿母さんの在所と云ふは解らなかつた。私は嘗て阿母さんの實家から來たと云ふ人を見たことがない。又阿母さん、自身の話も其時々によつて違つて居た。或時は津島在の庄屋の一人娘だとも言つた。勿論苗字帯刀を許され、近郷に知らぬ者もない大百姓

で、只四ツ目の御門と長棒の御籠だけが許されなかつたなぞと、そんな話も聞かされた。又或時は熱田に名高い宮大工の娘だとも言つた、時にはそれが伴の嫁に行つた話に變つたりした。左様かと思ふと、尾州侯の奥御殿に勤めて居たとも言つた。當時塾居の御身分であつた前の大納言様には、お妾が何人有つて、京都の公卿の娘でお竹様と云ふのが一番お氣に入りて有つたとか、お玉様と云ふのにお子様が御一方有つたが、それは長者町の饅頭屋の娘だとか、さも見て来た様に、内情に迄立入つて委しく話して聞かせたものだが、幾許そんな話を委しくした所で、阿母さんの無い實家が有る様には成らないのだから仕方がない。

で、親爺が死んだ年の秋阿母さんは、私を伴夫婦に預けて置いて、先祖の墓詣りをすると云つて、一人で名古屋へ出掛けて行つた。半月餘り逗留して来たが、歸つた上の話に、例の食客を一人置くと云ふ相談が持上つた。阿母さんの話では、何でも自分が前に嫁附いて居た家に生んで置いて来た息子で、私のためには父親違ひの兄だと云ふのだ。私もそんな兄弟が有らうとは夢にも知らなかつた、だけに大分變な心持がした。が、阿母さんはそんな事には頓着しなかつた。何でも其男は二百五十石の世取りに生れたが、世の移り變りに伴れて、今では三味線屋渡世の叔父の家に食客をして居る。又其叔父が強慾で碌々着る

着物も宛てがはない。二十七にも成つて、此寒空を見掛けて垢染みた袴一枚で慄へて居るのが見るに忍びなかつた。で、此方へ引取つて遣れば、當人は勿論助かるし、又自宅も帳面の整理や掟米の取立にも、わざ／＼親類へ頭を下げなくとも濟む。兩方都合が好からうと云ふのだ。

私は只そんな可憫相な人なら自宅へ來ても可いと思つた。で、左様言ふと、阿母さんは無暗にはしやいで、

「それではお前の手て手紙を一本書いて遣つてお呉れや。まあそれを見たら、彼の兒が何んなに喜ぶぢやろない。屹度直ぐ遣つて來るぞえ、直ぐに——」

私は何事も阿母さんの意の儘に成つた。阿母さんはそれを待ち兼ねた様に、町迄自分で手紙を入れに行つた。それから急にそは／＼として夜晩迄其男のことばかり話して居た。男の名は曲淵彦輔と云つた。話の様子では、彦輔の阿父さんや祖父さんは駄目なんだけれど、曾祖父に當る人が偉かつたさうな。體格も六尺豊かの大男で、片手に碁盤を差上げて、其上で孫に踊を踊らせやうと云ふ強の者、尾州侯の參勤交代には、毎も殿様の御自慢から籠側のお供が仰せ附かるので、此の肥太つた身體で五十三次を徒歩で往復しなければ成らぬ。勿體ないが股間が擦つて堪らぬと、内の者を捕まへて折々ばやいたものさう

な。私は其頃岩見武勇傳や地雷也物語を讀んで居たので、そんな話を聞くと、矢鱈に興奮して英雄崇拜の熱に浮かされたものだ。そんな偉い人の子孫なら食客も普通の人とは違つて居るかも知れない。早く来て、一緒に遊んで呉れたら可いなと思ひながら、枕に就たい。

次の朝、阿母さんは又彦輔のことを言出した。「あれの阿母さんと云ふ人は」と、何やら息を喘ませながら、「家の娘で、なか／＼姿色自慢ぢやつたが、其代り浮氣者で、お琴の稽古に通ふ時分からいろ／＼悪い噂が有つたさうな。俺は知らんけれど子供が出てからも出入りの商人とく／＼つ着いて、旦那は半地お取上げに成る。それは／＼豪い騒動が持上つたことさ。」

私は只怪訝な顔をして阿母さんの顔を見守つて居た。阿母さんはそれとも氣が附かぬらしい。一人で合點して、どん／＼話の先きを續けて行つた。

「えい、それや昔は内の者にでもそんな事が有ると、家事不取締とあつてお上から屹度お咎めが有つたものぢや。」

「一體そりや誰の事なの？」と私は不意に聞き返した。

今度は阿母さんが怪訝な顔をして私を見返した。私はなほ續けて言つた。

「その彦さんと云ふ人ね、阿母さんが生んだんぢやない？」

「あい、左様々々」と、阿母さんは連れて、云ひ紛らしながら眞根な顔をした。「俺の生んだのは彦輔の弟で、最う死んで仕舞つたのぢやわえ。可憫相に七つの歳にない」と言つたが、未だ氣に成ると見えて、「俺がそんな事を言つたかえ、彦輔が俺の子ぢやなんて、そんな事を言つたかえ。」

私は何だか阿母さんが氣の毒なやうな氣がして、何とも言はなかつた、此人は何を言つてるのやら分らない、嘘を吐くことが平氣で、それが又づ／＼拙劣なのが私の阿母さんの子供らしい特徴の一つで有つた。

其夜深けてから、表の門をどん／＼敲いて起す者が有つた。阿母さんが目敏く起きて開けに行つた。私も眼を覺ました、が話聲が何うやら噂の食客らしい。少時耳を欵て、聞いて居たが、其儘うと／＼と寢入つた。

## 二

明くる日から私の家の人数が一人殖えた。

私は食客を「兄さん」と呼ぶ様に阿母さんから吩咐けられて居た。が、自分が兄でない

ことが分つて見ると、何うも「兄さん」と呼ぶ氣がしない。と言つて、「彦さん」と言ふのも變なやうな氣がした。で、仕方がないから、遠方からぢろ／＼見詰めたまゝ、何とも言はずに居た。

彦さんは始終火鉢の傍に坐つて、顎の下を撫でながら、一本づゝし／＼ぐくぐく様にして鬚を抜いて居た。何方かと言へば、ひんねりむつりした男で、滅多に口を利くこともなかつた。勿論、私と一緒に遊んで呉れはしない私は何だかの外れたやうな氣がした。

阿母さん一人そは／＼と氣を焦燥つた。彦さんが古布衣一枚引張つたまゝ、着替さへ持つて來なかつたと云ふので、早速死んだ親爺の着物をして着せることにした。それも縞柄が氣に入らないとかで、彦さんは自分で町の染物屋へ行つて、其上に緋の型を置かせて來た。私は妙な事をするものだと思つて見て居た。それから帽子もなしに來たので、序に茶の中折帽子を買つて來た。私にも其時流行つた烏帽子を逆様にしたやうな、スコッチ製のを一つ買つて來て呉れたが、私の頭が大きいので旨く這入らなかつた。それを取代へに、私を伴れて町の勤工場へ行つたのを今でも覚えて居る。其頃私の町にも始めて勤工場と云ふものが出來た。

で、一通り彦さんの服装を拵へるにも一二箇月かゝつた。阿母さんは毎日針を持ちなが

ら來る人毎に彦さんの身上話をして聞かせた。其たび叔父夫婦が人身御供に上つた。何でも彦さんの阿父さんと云ふ人は、秩祿奉還の後だん／＼貧乏をして、賣喰ひに賣喰ひを重ねて來たが、終ひには賣る物がなく成つて、寺に有る、先祖代々の墓の石塔迄賣つて喰つたのださうな。其寺に先祖の系圖が預けて有つて、それより外に曲淵家の重寶は一つも残つて居ない。是非それを持つて來いと、阿母さんは其話が出るたびに彦さんに催促した。彦さんは只にや／＼笑つて居た。

又、此の彦さんと云ふ男が、それ迄何をして居たのか薩張分らない。琴や三味線を造る家に居候をして居たと云ふが、手にそんな藝をおぼえて居る様でもなかつた。阿母さんの話では、何處かの稅務署に長い間小役人をして居たが、毎も出勤の時間に遅刻をする。署長からはたび／＼時計を買へと勧められたが俸給が少ないために、それだけの錢が無いと言ひ立て、應じない。餘り何度も言はれるので、或時柱時計に紐を着けて、ぶら／＼頸に掛けながら出勤した。到頭それがために免職に成つたと云ふのだ。私は其話を聞いて心から面白かつた。げら／＼と聲を上げて笑つて居たが、何うも嘘の様な氣がした。彦さんが又そんな度胸の有る男とも思へない。

私の家へ來てからも、彦さんは別にこれと云つて何も爲なかつた。偶に無盡の講中へ掛

金を持って出て行つたが、其外は大抵家にぶら／＼して居た。ある時、私は彦さんが内密でこそ／＼長い手紙を書いてるのを見附けたことが有つた。

「内密だよ、阿母さんに内密だよ」と、彦さんは遠く、押隠しながら言つた。

私は黙つて合點々々をした。未だほんの子供だつたけれど、私はそれが如何いふ手紙だか解つたやうな氣がして居た。時々女の手蹟で書いた彦さん宛の手紙も来た。

又、ある日彦さんは、町へ東京役者が来たと云つて、私を伴れて芝居見物に行つた。何んな狂言で有つたか、今はおぼえて居ない。只其歸途に、私は初めて牛肉と云ふものを喫べさせられた。それから彦さんはちよ／＼私を伴れて出歩く様に成つた。ずつと後に成つて、彼の芝居の日に名古屋の女が来て居たと云ふが、お前は知らないかと訊かれた。私は全然氣が附かなかつた。

そんな斯んなして、其年も暮れた。又春が来てほ／＼暖かく成つた頃、彦さんが私を伴れて伊勢詣りをするに云ふ相談が持ち上つた、序に檀那寺へも寄つて、曲淵家の系圖を取つて來ようと云ふのだ。

### 三

私は汽車を見たことが有つても、未だ汽車に乗つたことはなかつた。で、プラットホームに立つて汽車を待つ間絶えず胸の動悸がして居た。い／＼列車が停車場へ着いて、一杯に蒸氣を孕んだ機關車がごと／＼と音を立てて居るのを見ると、何だか大きな生物の腹の中へでも這入るやうな氣がした。私は彦さんに手を曳かれながら、往き交ふ群集の袖の下をくぐる様にして、三等の客車へ乗込んだ。

汽笛が鳴つた。そろ／＼と列車が動き出した。それに伴れて、家も、道も、道の上の子守も、遠くの山も林も、有らゆる物が皆後へ／＼と移つて行く、私は窓の傍に坐つて、額を窓硝子へく／＼着ける様にしながら、凝乎とそれを見送て居た。わ／＼と騒す聲が急にしたりと思ふと、田圃の小徑に草刈の子供が五六人立つて、両手を振りながら、汽車を目蒐けて何やら叫喚いて居た。

「そんなに直き下を見て居ると目が眩ふぞ。最つと遠方を見て居るんぢや。」

不意に彦さんが注意した。私はそれを耳にして、つと振回つたが、途端に汽車は素晴らしい音響を立て、鐵橋にかゝつた。私は思はず聲を上げようとした。間もなく列車は田圃

の中の停車場にとまった。私の目の前に小さな稻荷の祠が有つて、赤い鳥居に同じ色の金巾の幟が二三本貧し相こ立つて居た。正一位稻荷大明神と書いた墨の色の雨に、じんだのが、如何いふものか停車場を出てからも私の眼に残つた。

それから、二つ許り停車場を越して、枇杷島の堤を渡つた頃から、うら／＼と晴れた空に五層の城樓が見え出した。土居の松、角櫓から右手へかけて、町の臺が一面に海原の様につづく、私が田舎者らしい驚喜の眼を放つて、小さい胸を轟かして居る間もなく、列車は大うれりに哇つて笹島の停車場の構入へ這入つた。

そろ／＼と降りて行く乗客の後に跟いて私達も改札口を出た。私は只人数の多いのにはげ／＼して居た。幾たびも彦さんに氣を附けられながら、やつと停車場の構内を離れた。

で、先づ桑名町の「叔父」の家へ立寄つた。成程琴、三味線、月琴などの樂器が所狭い程店に並べて有つた。中の間に通されて、少時叔父夫婦と話をして居たが、彦さんは一寸用達しに出て来るから、其間此處に待つて居らぬかと言つた。私は頭を掉つた。で、止むを得ず、彦さんは私を伴れて其家を出た。

最初二人は大通りを歩いて居たが、だん／＼それが狭く汚く成つて、唯ある路次を抜けると、今度は又二階三階と見上げるやうな大厦高樓ばかり續く町筋へ出て、私はそれが色

を賣る遊廓だと云ふことも臆ろげながら知つて居た。それから又横町の狭い小路へ曲つた。小ぢんまりした出格子の家のつゞく中に、一軒の入口に紺の暖簾の下つた店が有つた。彦さんは暖簾へ首を突込んで何やら言つて居たが、やがて私を磨いて家の中へ這入つた。私はずつと後に成つて知つたで、其家は藝娼妓の口入をする慶庵であつたさうな。

私達は直ぐ中の間へ通つた。中の間には大きな長火鉢を据ゑて、鐵瓶の湯がぢん／＼沸つて居た。天井から朝顔で明りを取る様にしたので、室の様子が一體に陰氣臭く見えたが、其邊中好く拭き込んで小綺麗に棲んで居るものらしい。彦さんは上櫃に腰掛けたまゝ、此家の娘らしい若い女と話をして居た。私は彦さんの背後に小さく成つて坐つて、ぼんやり四邊を見廻しながら、時々偷む様に女の顔を見遣つた。平顔で色の白いのが眼に立つた其女は、黄八丈の羽織を引被けて、長火鉢の前にだらしなく横坐りに成つて居たが、彦さんの話にも餘り氣乗りがせぬらしく、生返辭をして、鐵瓶を卸したり掛けたりしながら、私に向うを見るたびに屹度ぢろりと私を見返した。

「なも、此のお子さんがあれかいも」と、不意に其女が訊いた。

彦さんは急に話の腰を折られたので、呆氣に取られた様に相手の顔を眺めて居たが、「うむ」と、しぶ／＼返辭をしながら詰らなさ相に側を向いた。

「左様、大人しいお子さんだわな」と、女は最う一度私の方へ向いて、眞向からぢろく見て居たが、其儘何とも言はなかつた。

私は自分を見て居られるんだと思ふと、わく／＼として顔が上げられなかつた。此女が例の手紙の女で有らうとは、私にも最初から解つて居た。何だか話の様子では、餘まり彦さんが大切にもされて居ないらしい。私は子供心にも彦さんが可憫相な氣がした。

其間、娘の母親らしい五十餘の婆さんが他所から歸つて來た。ぢろく二人の様子を見上げ見下した。彦さんは一層そわ／＼して、如何かして娘を散歩に連出さうとした。女はうぢ／＼として却々承知し相になかつた。終ひには氣の毒に成つたと見えて、婆さん迄が口を出した。

「折角あんなに言つて頂戴すに、お前も其邊迄お伴して來たら如何ぢやえ。」

「えい」と、娘は不精無性に立上つた。「ぢや、一寸待つて頂戴なも。」

かう言つて奥の間へ這入つたが、がちや／＼と簞笥の抽手の鳴る音がして少時すると羽織だけ着代へて出て來た。何時の間にかやら鼻の先に打粉をして、唇の色も光つて居た。

やがて、三人連れ立つて其家を出た。半町許り行つて鈎の手に曲ると、直に大須の觀音様の前へ出た、勿論御堂の上へは上らなかつたが、女は一寸足を停めて目禮したまゝ通り

過ぎた。私は妙な事をするものだと思つて見て居た。夕暮時の人の出さがる間を縫ふ様にして、又薄暗い横町の路次へ這入つた。源氏節だの犬の見世物だの、げば／＼した繪看板が並んで居たけれど、二人は見向きもしなかつた。私は覺束ない心持を抱きながら、二人の後から後れぬ様に隨いて行つた。

三人は唯有る蒲焼屋の二階へ上つた。私は最う二人の話をして居なかつた。側を向いて、屏風の貼り交ぜを讀んだり、床の間の布袋の置物を弄つたりして居た。誂へた物が來ると、女はそれを皿に分けて、

「さ、お上りやすな」と、私の前へ出して呉れた。私はそれをむしや／＼と喰つた。喰つて仕舞ふと、一人椽側へ出て欄干に凭れながら、凝乎と暗がりの空を見詰めて居た。七ツ寺の眞黒な塔の屋根が額の上へ突出して見えた。初めて生れた家を離れた心細さが胸一杯に蓋がるやうな氣がして、私はほろ／＼と涙を瀉した。

「おい、最う歸るんぢやぞ。」

彦さんが斯う言出したのは、餘程經つてからで有つた。二人は其女と別れて、又てく桑名町の「叔父」の家に歸つた。叔母さんが起きて居て、中の人に床を敷して呉れた。叔父は最う寢たと見えて、頭の禿げたやうな咳嗽の聲が奥の間でして居た。私は蒲團の隅



に小さく成つて、自分が居候に置いて貰つたやうな佗しさをしみく味ひながら、寝苦し  
い一夜を明かした。

## 四

明くる日もからりと晴れた空で有つた。

私達は熱田から紀州新宮通ひの船に乗つて居た。船は二百噸にも足りない位。だけれど、私はそれに依つて汽船といふものについて描いて居た有らゆる想像を充さうとした。勿論海も初めて見た、船房の圓い穴から覗く時、のたりのたりと脈搏つ海の面が一番壯大に見えた。甲板へ出て、煙筒から上る煙の渦に見惚れたり。船首に立つ波の繁吹きを眼が眩ひ相に成る迄見詰めたりした。又舵取が側目も振らず行手の渡の上を見守りながら、時々把手を回轉して居るのを不思議相に眺めて居たりした。

やがて船は四日市の港へ立寄つた。船貨の積入れをするものらしい。何日ぞや此處で積んで来た牛を解船へ移さうとして、過つて一疋を海中へ落した。牛はあの身體だから水面を泳ぐことが出来ない。却つて水の底を足に任せて駆け廻る。一町ばかり行つては、ぼか

りと水の上へ泛んで息を吐く。息を吐いては又海の底をのたくり廻つた。水夫人足は只あれよよと騒ぐばかりで、如何して遣ることも出来ない。到頭足掻き死に、死んで仕舞つたと云ふのだ。私はこんな話にも胸を躍らせながら耳を傾けた。

いよいよ其日の日足も傾いて、海岸の松原も烟つた頃、船は神社の港へ着いた。私も一日の船旅は飽き／＼して居たので、二たび陸地を踏むのが嬉しかった。夕方小寒く成ると一緒に、風が出て、解船の動搖が劇しかったが、それでも乗客は先を争つて乗移つた。棧橋へ着いて、直に乗合馬車へ乗移つたが、丁度解船で同船した上方者らしい二人の商人と又一緒に乗合せた。で、彦さんは話の緒口から、今夜其人達と同じ宿に泊ることにした。

山田へ着いた時は、日もとつぷりと暮れて居た。四人は馬車を降りて、町角に當る旅人宿に押上つた。隣づからの二間へ通されたが、私は只宿の建物が大きいのと、宿泊の人数が多いのに憫れ居た。勿論、私が宿屋に泊つたのはこれが初めてで、其時の宿料が一人前二十五錢で有つた。其外は何もおぼえて居ない。

明くる日は早朝宿を出立して、先づ外宮へ参拜した。杉の樹立がすく／＼として、幾抱へに餘る木の幹と、神前の夥しい紙のおひねりと、神馬の赤い可愛らしい眼とが何時迄も心に残つた。それから神苑を出て、一筋の清い道を五十鈴川上の内宮へ向つたが、其途中

で私は彦さんに訊いた。

「外宮様つて何ぢやらうな。」

「内宮様に對して外宮様と云ふのさ。」

「うゝむ、そりや解つちよるが、如何云ふ神様が祀つて有るんぢやろな。」

「如何云ふ神様つて、そりや豐受大神宮と云つて、何だ。此世界の五穀豐熟を司つて被坐しやる神様がお祀りして有るのさ。」

「ふうむ」と、私は感心して聞いて居たが、少時して、「あのな、彦さん。そりや矢張天子様が家來か。」

彦さんは解らないと見えて返辭を爲なかつた。私も強ひて訊かうとはせず、ちよいと走り彦さんの後から跟いて行つた。

が、私の心には他に最一つ如何しても解き難い疑問が有つた。それは昨宵上方の商人の話の不圖小耳に挾んだので、今朝からそればかり氣に成つた居た。露店で賣つて居る天の岩月の繪なぞを見ても、何うも氣にかゝつた。私はそれを訊かうか訊くまいかと、長い間躊躇したが、到頭思ひ切つて、

「なも」と、前に行く彦さんと呼んだ。

「うゝむ」と、彦さんは反方に向いたまゝ、氣のない返辭をした。

「あの天照大御神つて本當に女か。」

彦さんは吃驚した様に私を見返したが、「あゝ女の御方だよ。」

私は何だかの外的が外れたやうな氣がした。今迄男と女と云ふものについて抱いて居た考を裏切られたやうな何とも言へない心持がして、其儘口を噤んで仕舞つた。彦さんも別段口を利かなかつた。

古市の油屋の前も、店先から覗き込んだまゝ素通りした。縞さん紺さんの見世物も一軒だけ昔の名残を留めて居た。いよゝゝ内宮様へ着いたが、先づ「下乗」と書いた高札がいかめしく、森の木の子葉一枚にも、谷川の水一滴にも森殿の氣が行渡つて居るやうな氣がした。私はうやゝしく神前に額づいて、遙々來た國民の誠を捧げた。それから二たび下向の道に就いた。五十鈴川の河原には乞食どもが群をなして、橋の上から投げる小錢を竹の竿に結び附けた網で先を争つて受けて居た。私はそれが面白いので、何時迄も見て居たかつたが、彦さんが促す様にして先を急いだ。

それから何んな道を如何通つたか、好くはおぼえて居ないが、兎に角二人は朝熊山に差かゝつた。山の麓で、今朝宿を立つ時に別れた上方の客と落合つた。

「貴下方も朝熊へお廻りかな。」  
「や、お早にお着きて。」

こんな挨拶が、私達の外にも、同じ茶店で繰回された。四十餘りの襦袢の肌を脱いだ男が先達に成つて山を登り始めた。山道は汗の滲む程、ぼか／＼と晴れた日で有つた。

半道程登つた頃、私はそろ／＼足が勞れて休みたく成つた。其時先頭に立つた襦袢の男が、一本取残されたやうな櫟の木の下へ立寄つた。私達は半町の餘も後れて居たが、やつと追附いて見ると、其處には一枚席を敷いて、五六人の男が何やら賭博をして居るらしい。立寄つて見物した。

賭博は一から六迄の數を小さい紙片に明礬で書いて置いて、それを辨當箱のやうな曲物の水に浮すと、歴々と文字が現はれる。それを中てツ競するのだ。十錢二十錢と小錢を賭けて遣るが、面白い程好く中る餘り好く錢を持つて行かれるので、胴元の男は少々眼が眩んで居るらしい。襦袢の男は一枚其紙片を取つて、日に透かし見て居たが、窃と彦さんの袖を引いて、

「こりや中る筈ですよ、ちやんと字が浮いて見えて居る。何う私がつ張つて見よう」と。

小聲で言ひながら、胴元に向つて、

「おい、私も一番張らして貰ふぜ、可いかいこれだぜ、三に二十錢置くと——さ、これを水に入れるよ。確か見とつてお呉れや。」

矢張三の目が出た。二十錢は忽ち倍に成つて戻つた。こんなにして、襦袢の男は瞬く間に一圓許り儲けた。一人北叟笑みをしながら、又紙片を極めて居たが、

「如何ぢやい、此奴は——五の字が歴々見えて居る。さ、五十錢行くよ」と、勢好く五十錢の銀貨を投出したが、不圖彦さんを振回つて、「如何です。貴方も二貫だけ行つて見ちや。こんな旨い仕事はない。宛然只貰ふやうなものですぜ。」

彦さんは先刻から懐中へ手を入れて、腕かり紙入を押へて居たが、思はず釣込まれて二十錢の銀貨を抛り出した。が、如何したのやら、今度は言ふ目が出なかつた。七十錢の賭錢は綺麗に胴元へ持つて行れた。

「や、失敗つたぞ。見損つたかな。そんな筈は無い心算ぢやが」と、襦袢の男は急に狼狽へたやうな振をした。「だが、今度は大丈夫だぞ。これを一に御覽なさい。如何しても一に違ひないぢや有りませんか。さ、最一度一に行きますよ。」

彦さんは漫ろに又二十錢出した。それが又直に持つて行かれて仕舞つた。

「何うも變だな」と、其男も溜息を吐いた。「えい、切めて取られただけ取返して遣りませうや。さ、今度は五十錢お出なさい。」

が、其五十錢も忽ち取られて仕舞つた。此次には一圓取返すためにそれだけ張つた。次には二圓取返すためにそれだけ張つた。何れもこれも皆取られて仕舞つた。彦さんは稍氣が氣でなく成つた。上方の客もそれ迄立つて見て居たが、それを見ると、つと立つて行つて仕舞つた。

「れ、餘まり残念だから、最う一遍だけ張つて見ませうや。大丈夫私が取返して上げますよ。」

かう言つて、襦袢の男は彦さんの手に持つた財布から、殆ど換取る様にして、又四圓だけ出させた。が、それも瞬く間に持つて行かれた。彦さんは最う眞蒼な顔をして眼も血走つて居た。最初から多くも持つて出されない旅費だから、それだけ取られたら最う故郷へ歸るだけの旅費が足りないかも知れない。少時血眼に成つて、例の紙片を透して見て居たが、

「さ、これだけ張るぞ」と言ひながら、紙入の底を叩いて、七八圓の紙幣銀貨を取交せて益莫産の上に並べた。彦さんは此一戦に自分の運命を賭しようとしたのだがそれも無駄な

勞力で有つた。今迄歷々と三の字に見えた紙片が、水に入れて見ると、何の事はない、四の字に早替りをして居る。一瞬の猶豫もなく、紙幣や銀貨は胴元の膝の下に掻き寄せられた。

彦さんはぼんやりして仕舞つた。何時の間にかやら四邊の人も散つて、胴元は此邊が見切り時とそこ／＼に莫産を片附けて歸らうとした。が、此儘置いて行かれては、私達二人は山の麓へ降ることも出来ない。彦さんは哀願する様にして、自分の被つて居た帽子を抵當に一圓だけ貸して貰はうとした。胴元は一寸それを手に取つて見たが、

「こんな物駄目だい、一圓なんて貸せるものか」と、捨打る様に云つた。

彦さんは二たびはたと當惑した。此上手離せるものは私の縮めて居る兵兒帶の外にない、私は附紐があるから、兵兒帶なしでも濟ませないこともない。

「なア、其帶を貸して呉れんかや。」

彦さんは私に向つて氣の毒相に言つた。私はそれ迄氣拔けがした様にぼんやり皆衆の顔を見廻してゐたが、それを聞くと、どきまぎしながら連れて兵兒帶を解いて渡した。で、漸と一圓の小使錢を貰つて、早々其處を立退いた。一町餘り來てから振向くと、胴元も襦袢の男も何處へか影を隠して其邊に見えなかつた。

私は如何成ることかと無暗に心細かつた。彦さんはむツつりした顔をして、前に立つて黙つて山道を登つて行く、山の頂上が近くに成るに伴れて、裏坂と出合ふ邊から、掛茶屋などが客を呼んで居たが、そこへ這入つて休むことも出来なかつた。名物の萬金丹さへ買へなかつた。

が。山の奥に煉塀など周らして、朝熊神社の丹塗りの社が木立の中から聳えたのを見た時は、何となく氣高く尊いやうな心持がした。奥の院からは、鳥羽の港を始めとして、知多、碧海の兩半島が一目に見渡される。海の色が繪の様に濃い藍色をして、島陸に白帆の浮いて居々など、私は生れて初めて目の當り自然に接した。何だか心の底から洗はれるやうな氣がして、一時は前の不安も消えた。が、二たび歸途に就いた時は、又不快な心持がして、裏坂の急な石高道も胸を突かれる様であつた。

十八町の裏坂を一息に下りた。それから一里許り徒歩で歩いて、二見ヶ浦へ出た。徐々日も暮れたので、兎に角宿を取ることにした。が、昨宵の宿から指して呉れた大きな旅館へは行くことが出来ないで、別に小ッほけな宿屋を捜して泊つた。私は其夜少時眠れなかつたが、何時の間にかぐうぐうと寝入つて仕舞つた。

## 五

明くる朝、私は最う氣も變つてけりりとして居た。宿を出て、裏の砂濱傳ひに女夫岩の方へ日輪の昇天を拜みに行つた。私は砂の中から波に曝された美しい小石や貝を拾つて袂へ入れた。女夫岩の邊りには、最う參詣の群集が溢れて居た。私達も其背後に立つて日の御子の光榮を祝した。

下向の道すがら、貝細工の店などを見ると、私は又金子のないのが心細く成つたが、電報を打つにしても、二見ヶ浦には電信局もない。彦さんは又私を促して兎に角山田迄出ることにした。

で、山田へ着くと、彦さんは又成だけ金子の費らなさうな家を捜して宿を取つた。そして、事情を打明けて二三日の逗留を頼んだ上、直に郵便局へ電報を打ちに行つた。其宿は今迄泊つた所とは全然恰好の違つた、ひっそりとした閑かな家で、白髪的女隠居が自分で膳を持つて來たりした。何だか變でも有るが、こんな風で居るには却つて居心地が好かつた。

私達は殆ど閨の外へ出ないで、室にばかり閉籠つて居た、彦さんは終始屈託相な顔をし

ながら、時々手帳を出して、鉛筆を嘗めては何やら細かい字で書留めて居た。其間、私は何をして居たか殆どおぼえがない。

やつと三日目に爲替が郵便で着いた。私の宅では電報と云ふものを初めて受取つたのだから、屹度吃驚したに違ひない。後で聞けば、阿母さんなどは最う私が海へでも落ちて死んだものゝ様に騒いださうだ。併し電報爲替と云ふものを知らないから、平氣でお金子を手紙で送つて寄越した。で、其金子を幾許有つたか知らないが餘り餘分にはなかつたらしい。兎に角それが有る以上は、こんな所に永居は無用だ。彦さんは早速貝細工だの、萬金丹だの、伊勢詣りの土産を調べて、其日の間に此町を立つことにした。

前からの豫定で、今度は陸路を取つて松坂から津の方面へ向つた。先づ馬車の立場へ行つて、乗合馬車で逃げる様に山田を後にした。此町を離れて二三里も来てから、私も始めてほつと自由に息を吐けるやうな氣がした。馬車の中からきよろく、四邊を見廻して、聞かでもの事を彦さんに訊いた。

かれて阿母さんから戻路にはお辛洲様へ寄つて来て呉れと吩咐かつて居るので、彦さんも松坂で馬車を降りると人に訊いて、石の目標の立つて居る角から側道へ這入つた。未だ日は高かつた。二人は少時後に成り前に成りして歩いて居たが、

「なア」と、彦さんは背後から聲を掛けた。「其帽子俺に被れんぢやるか。」

「如何かな。」

「どら、一寸貸して見い。」

私は黙つて帽子を脱いで彦さんに渡した。彦さんはそれを手に取つて被つて見たが、私は子供の時鬪抜けて頭が大きかつたから、丁度好い工合に頭に嵌つた。

「これ少時俺に貸して置け。な、可いかい。」

「あい、如何でも可いよ。」

私は二たび前に立つて駈出した。其頃烏帽子を逆様にしたやうな帽子は、子供でも大人でも一様に被つたものだ。

お辛洲様と云ふのは海岸の松原に在つた。松原の中に一軒海水浴めいた旅館が有つた。私達は海に面した一間に陣取つて、湯に這入つてから波打際を散歩した。其夜、私は初めて波の音を聞きながら安らかな夢に入つた。

明くる朝、日も高く昇つてから、二人はやう／＼其處を立つた。彦さんは平氣で又私の帽子を被つて出た。私は帽子もなく、兵兒帯もなく、附紐を結んで尻に垂れながら菜の花や青麥の街道をちよ／＼と小走りに、彦さんが佛頂面して行く後から隨いて行つた。時

時百姓が菜の花の中に立つて、糞桶の肥料を撒いて居るのを見掛けた。私は自分の村と違はぬなと思つた。

津へ着くと、丁度埠頭から熱田通ひの船が出る所だ。それに乗れば、其日の中に熱田迄行かれると云ふので、急に陸路を止めにして船に乗込んだ。熱田へ着いたのは、日も暮れ暮れの頃、其儘名古屋を素通りにして、笹島の停車場から汽車に乗った。私は散々勞れて汽車の中でもうと／＼坐眠りをした。最う自宅へ歸るのだと思ふと、夜の旅ながら氣が弛んだものらしい。やつと九時過に村に近い町の停車場へ降りて、睡眼を擦りながら、其夜は知合の家をたよつて泊つた。

其處は客稼業をして居る家で、私達が着いたのを見ると、しや熊や結綿に結つて、赤や紫のけぼ／＼した襦袢を被た。眞白に顔を塗つた女どもがぞろぞろと遣つて来て、二人を取巻きながら、いろ／＼な事を訊いた。私は睡たいので好い加減に返辭をした。それが可笑しいと見えて、何やら言つてはげら／＼と笑つた。

「まあ氣の毒相に、こんな服装をして。」

「これで伊勢街道をべた／＼隨いて廻つてらッせたのかなも。」

「本當になも。」

「あはい、あはい、はい。」

こんな事を言ひながら、私の附紐を引張つて見てはくつ／＼笑つた。此連中には私達の冒険が餘程可笑しかつたらしい。私も何だか今更恥かしいやうな氣がした。が、それよりも睡いのが先に立つた。

「がだ、X様はお睡いませえも、先刻から欠伸ばかりしてらッせるに、最う寢せて上げてお呉りやアセ。」

やう／＼年嵩の一人が氣附いて言つた。

「あ、左様だ。此方へ被入つせ、寢せて上げますに」と、此中の小母さんが私を奥の間へ連れて行つて呉れた。其後のことは私も知らない。

明る朝、早く自宅へ知らせたと見えて、阿母さんは私が未だ飯を喰はぬ間からとつぽ乾いて遣つて来た。私は好くも聽いて居なかつたけれど、何でも彦さんが着て来た袴を突着けて、「最うお前の様な人は一刻も宅に置かれなから、早々歸つて呉れ」と手強く談判したらしい。彦さんは平あやまりに謝つた。此家の小父さんも元來彦さんを私の宅に置くことは反對なので、傍に聽いて居ながら、別に口を利かうともしなかつた。で、阿母さんが「なも、左様ぢや有りませんか」と、此人の同意を求め様言ふと「うむ」と、灰吹で烟管

を叩きながら開き直つた。

「一體、彦さん、私にはお前さんの心得が解らない。そりや金子は大した額ぢやないから、如何でも可い。如何でも可いが」と、れち／＼彦さんを遣込めにかゝつた。彦さんはぐうの音も出ない。只しほ／＼と俯向いたまゝ、自烈に相に顎の鬚を抜いて居た。

其間、阿母さんははら／＼しながら聴いて居たが、堪らなく成つたと見えて、

「もしツ」と、小父さんの方へ小膝を進めた。其眼には涙が一杯湛つて居た。

「貴方も餘まり口が過ぎやしませんか。自分の事を考へたら、私の前ぢやそんな日は利かれん答でせう。」

かう云ふのを手初めとして、びし／＼驚し立てながら、泣き饒舌りに饒舌つた。小父さんは飽氣に取られて黙つて仕舞つた。結局、彦さんは又私の宅について居ることに成つた。

で、其日の午後、私達は打連れて長良の橋迄來た。橋の袂には、かれて阿母さんが其用意をして置いたと見えて、村から盛装した駄馬が來て待つて居た。青貝ずりの大和鞍を置いて、天鷲絨に金糸銀糸の縫をした馬衣を被せながら、村の若者が紅白だんだら染めの手綱を曳いて行く、初めて伊勢詣りをした者が有れば、かうして迎ひに出るのが私の村の習

ひで有つたらしい。

私と彦さんとは鞍の兩側に別れて乗つた。若衆は皆揃ひの手拭で頬被りをして、「はい、はい」と、馬の手綱を取りながら、一人が音頭を取つて、

「お伊勢詣つたら」と唄ふと、一同聲を揃へて、「ヨンヨイ」と囃す。「こんな子が出來た、ヨイセエ、ハリヤナ。お名を附けましょ、ヤンレ、伊勢小松。コリヤ／＼ヤートコーセエ、ヨイイヤナ、ハリヤ／＼コレハノセ。さ、何でもヨイイヤセ。」

唄の絶間に、ぢやらん／＼と馬の鈴が成る辻々に村の女子供が出て見物して居ると、ばら／＼煎餅を撒いた。かうして自宅へも寄らないで、先づ村の鎮守へ行く、此處で道中恙なく戻つたお禮を申して、拜を遂げる。それから、四斗樽の鏡を抜いて、村一同に振舞ふのだ。若衆は皆遠慮なしにがぶ／＼と飲んだ。私は晴ましい心地をしながら、それを見て居た。

元來、こんな振舞ひは大勢揃つて参宮でもした時にするのださうな。阿母さんは只負けぬ氣から遣つて見た。一つは彦さんを村の若衆へ披露する氣も有つたらしい。



大正三年十月十九日印刷  
大正三年十月廿二日發行

(定價拾錢)



著者  
發行所  
印刷者  
印刷所

森田草平  
植竹喜四郎  
東京市神田區佐久間町四丁目二十三番地  
細萱武四郎  
東京市芝區愛宕町三丁目二番地  
東洋印刷株式會社

發行所

東京市神田區佐久間町四丁目二十三番地  
振替東京一二九五三・電話下谷三四一九

植竹書院

# 植竹文庫第一編

本文庫は世界的の名著中、雄編大作のみを収め之を六號活字にて縮刷す

## 新刊 縮刷 サニン 全譯

上下 合本

■アルツイバシエヴ作  
■武林無想庵譯  
新形總布 極美本 定價九十錢  
(郵税八錢)

■讀賣新聞評・アルツイバシエヴの傑作サニンの翻譯である、原著者が多年心血を絞り得たこの勞作の効果が惜しくも露文壇に於て、發賣禁止の厄に逢つた程人間の自然の性情性慾を忌憚なく描破し盡した一代の傑作たることは今更めかしくいふまでもないが、今無想庵氏の翻譯によつてこの傑作が日本の文壇に移植されたことは慶賀すべきことである。氏の譯此の機微の消息を遺憾なく流露し得てその内容よく生効しきながら原作の情調に摘する觀がある。

## 内容の豊富と價格の低廉

本書は全六號活字にて一頁壹千字乃ち菊版二頁に匹敵する内容を有す。故に廉價なる事、吾が文明叢書を除きて本文庫に優るものなし。

森田草平氏著

縮刷 小説 煤

煙 四卷 全本

八版 菊半裁新形 全六號活字組 定價九十錢 郵税八錢

特製定價 壹圓六十錢 郵税八錢

特製(六版中二)

上等畫布の表紙に二青畫家が一冊づゝ得意の内筆を揮ひ。著者草平先生が扉に題號、姓名、番號を一々揮毫せしもの(殘本僅少)

鈴木三重吉氏著

縮刷 珊瑚樹

新刊 (三重吉傑作選集)

内容  
○櫛  
○女  
○穴  
○小  
○黒  
○血  
○一枚の瓦  
○お三津さん  
○赤い鳥  
○桐の雨

今迄に著した十數冊の小説の中から、著者自身に最も氣に入つた作物ばかり選り集めて縮刷したもので、皆當時の文壇に傑作として好評されたものばかりです。

津田青楓氏裝幀 煤煙同型、美本 六號活字組、四百餘頁 一頁七百卅餘字詰 定價 九十五錢 郵税 八錢

百科  
精英  
**文明叢書**

ポケット形、一篇百頁  
全六號活字 一頁四百  
字より七百字に至る

理想の叢書出づ

●定價壹編に付き拾錢郵税二錢

叢書中夾開の如く一冊二篇を包有する  
ものは廿錢、飛行機の如く一冊三篇を  
有するものは卅錢となる

文學、宗教、歴史、科學、哲學のあらゆる  
方面に涉りて、世界文明の代表作物を的確  
に、廉價に讀者に紹介する世界圖書館

■内容精選

書籍の價値は實に在り。乃ち本叢書は内容の選擇  
に就て全力を擧げて執筆者に現代の大家及び新進  
の精英を網羅す

■低廉無比

一篇百頁内に原稿紙百枚乃至二百枚を有して定價  
僅かに十錢なるを以て一枚の價實に一厘或は五毛  
さなる是を他の普通の圖書の定價に比較する時は  
三分一或は四分の一の廉價となる

文明叢書					
第十編	第九編	第八編	第七編	第六編	第五編
戀を知る頃	朝顔	馭者ヘンシエル	マダグダ	決闘	カイゼル
谷崎潤一郎著	鈴木三重吉作	秦豊吉譯	ハウプトマン作	ブーデルマン作	藤澤古雪譯
				チエホフ作	小山内薫譯
				ワイエルド作	生田長江譯
					福本日南著

明文叢書

第十一編  
第十二編  
第十三編

飛行機

廣部工學博士序  
德永理學博士著  
早大工學士著

第十四編

ラジウム講話

ソヂイ教授著  
永代靜雄譯

自第十五編  
至第十九編

全譯 古城の秘密

モールス著  
ルブラン著  
岡村千秋譯

自第二十編  
至第二十三編

全譯 ドリアン・グレイ

ワイルド作  
佐藤春夫譯

第二十四編

心中未遂

正宗白鳥著

第二十五編

ぼんち

岩野泡鳴著

第二十六編  
第二十七編

全譯 露西亞印象記

ブランデス作  
中澤臨川譯

明文叢書

第二十八編

全譯 キツクス

チエホフ作  
廣津和郎譯

第二十九編

六月

相馬泰三著

第三十編

踊

森田草平著

第三十一編

樂園

田山花袋著

第三十二編

四十女

德田秋聲著

第三十三編

山吹の花

田村俊子著

第三十四編

桐屋

後藤末雄著

274  
1027

明文叢書

第三十五編 全 譯 夕 イ ス  
フナトール作  
 フランス作  
 谷崎精二譯

第三十七編 全 譯 獄 中 記  
オスカール作  
 廣津和郎譯

第三十八編 全 譯 ウキルヘルム・テル  
シルレル作  
 舟木重信譯

第四十編 全 譯 變愛と道德  
エレン・ケイ作  
 金子筑水共譯  
 田制佐重

第四十二編 全 譯 父  
ストリンドベルヒ作  
 橋田東聲譯

第四十三編 全 譯 オピウムエーター  
ド・クオンセイ作  
 辻潤譯

第四十五編 全 譯 暗 の 力  
トルストイ作  
 林鷗南譯

終

